

松本市下原・埋橋遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1987・3

松本市教育委員会

松本市下原・埋橋遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1987・3
松本市教育委員会

序

山辺地区は以前から多くの遺跡が知られており、文献にも山辺郷として記載があり古代史上重要なところあります。特に山辺中学付近は信濃國府推定地の1つである慾社地区的周辺であり古墳時代の土器などが出土するところとして知られておりました。山辺中学校の敷地内からも土器が出土し現在山辺歴史民俗資料館に展示、収蔵され多数の人が関心を寄せているところであります。今回は山辺中学の改築工事が最終年度となりまして発掘調査も59、60年度に引き続き3回目となりました。

この調査も文化財保護のための記録保存を目的としており、松本市教育委員会が担当いたしました。調査の結果は本文中に詳述いたしておりますように、古墳時代の竪穴住居址が4軒確認されました。旧校舎が建っていた場所であるためかなり壊されておりましたが、3年間を通じて発見された竪穴住居址は7軒となりました。当地区内での発掘調査は、まだ過去に1例あるのみですので今回の調査が山辺の古代史解明の手がかりとなり、また、調査結果をまとめた本書によって文化財の大切さ、保護の必要性を御理解いただければ幸甚に存じます。

最後に調査にあたりまして、多大な御理解と御協力をいただきました山辺中学校をはじめ関係機関の皆様に衷心より謝意を表して序といたします。

昭和62年3月

松本市教育委員会

教育長 中島俊彦

例　　言

1. 本書は昭和61年6月13日から7月2日にかけて行われた松本市下原遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。
2. 本調査は松本市立山辺中学校校舎改築にともなうもので、松本市教育委員会が調査を行なった。
3. 本書の編集は事務局が行なった。執筆は、第2章第1節太田守夫、第2節三村肇、第3章第3節直井雅尚、第4章神沢昌二郎が担当し、他は熊谷康治が担当した。
4. 本書作成に関して次の者の協力を得た。遺物整理、復元　五十嵐周子、滝沢智恵子、土橋久子　土器実測、トレース　土橋久子　遺構図整理、トレース　開島八重子、藤井尚子
5. 出土遺物及び遺構測量図類は松本市立考古博物館が保管している。

目　　次	挿　　図　　目　　次
<p>第1章 調査経過</p> <p>第1節 事業の経緯 1</p> <p>第2節 調査体制 1</p> <p>第3節 作業日誌 1</p> <p>第2章 遺跡の環境</p> <p>第1節 遺跡の立地と地理的環境 3</p> <p>第2節 周辺遺跡 6</p> <p>第3章 調査結果</p> <p>第1節 調査の概要 11</p> <p>第2節 遺構</p> <ul style="list-style-type: none"> 1. 第1号住居址 12 2. 第2号住居址 17 3. 第3・4号住居址 17 4. 掘立柱建物址 19 5. 土壙・ピット 20 <p>第3節 遺物 28</p> <p>第4章 調査のまとめ 37</p>	<p>第1図 遺跡分布図と調査位置 2</p> <p>第2図 地層断面図 3</p> <p>第3図 周辺遺跡 5</p> <p>第4図 調査地区範囲図 8</p> <p>第5図 調査地区全体図 9</p> <p>第6図 第1号住居址(1) 13</p> <p>第7図 第1号住居址(2) 14</p> <p>第8図 第2号住居址(1) 15</p> <p>第9図 第2号住居址(2) 16</p> <p>第10図 第3・4号住居址 18</p> <p>第11図 掘立柱建物址 19</p> <p>第12図 土壙(1) 22</p> <p>第13図 土壙(2) 23</p> <p>第14図 土壙(3) 24</p> <p>第15図 土壙・ピット(1) 25</p> <p>第16図 土壙・ピット(2) 26</p> <p>第17図 南壁土層断面図 27</p> <p>第18図 出土土器実測図(1) 32</p> <p>第19図 出土土器実測図(2) 33</p> <p>第20図 出土土器(59年度) 34</p> <p>第21図 出土土器(60年度・1) 35</p> <p>第22図 出土土器(60年度・2) 36</p>

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯

本調査は松本市立山辺中学校校舎改築にともなうもので、昭和59・60年度より校舎の改築がなされたが、本校が下原遺跡内にあり、また推定信濃國府の調査範囲に入っていたため、国府調査の一環として調査を行ってきたものである。

本年度は過去2回の発掘調査結果と、国府調査が本郷大村地区を中心に行うことから、校舎建設の一環として担当課と協議し、教育委員会が調査を担当することとしたものである。

第2節 調査体制

調査団長 中島俊彦（松本市教育委員会教育長）

調査担当者 神沢昌二郎（松本市立考古博物館長）

現場担当者 熊谷康治（社会教育課）

調査員 三村 鑑、横田作重、太田守夫

協力者 中込孝久、平井甲子造、柳沢義武、酒井文雄、吉沢詮三郎、西原いさ子、倉沢充子、浅倉フク、綱島甲十枝、小松まさ子、当田ふみ子、土橋久子、吉沢克彦、加藤厚子、塩原久和

事務局 浜憲幸（社会教育課長） 岩渕世紀（文化係長） 直井雅尚（主事）

第3節 作業日誌

昭和61年6月13日(土) 晴 発掘開始。重機による掛土作業。	6月24日(木) 曇 住居址平面図作成。ピット掘り下げ開始。
6月14日(日) 曇 重機による掛土作業継続。	6月25日(金) 曇のち雨 2住造物取り上げ。土壤掘り下げ継続。
6月16日(日) 曙 検出作業開始。	6月26日(土) 晴 1住造物取り上げ。ピット・土壤平面図作成。
6月18日(火) 晴 住居址2軒・ピット・土壤検出。	6月27日(日) 曙 1・2住掘り上げ。3・4住掘り下げ。
6月19日(水) 晴 1住掘り下げ。ピット・土壤半剖。	6月28日(月) 曙 3・4住平面図作成。土壤観察。
6月20日(木) 晴 1住・ピット・土壤土層図作成。2住掘下げ。	6月29日(金) 曙 土 sondage 計測。
6月21日(金) 曙 2住・ピット・土壤土層図作成。土壤半剖。	7月1日(土) 晴 山辺中学校社会科クラブ見学。全体団作成。
6月23日(日) 晴 ピット・土壤平面図作成。	7月2日(日) 曙 造物・図・用具等整理。



第1図. 遺跡分布図と調査位置

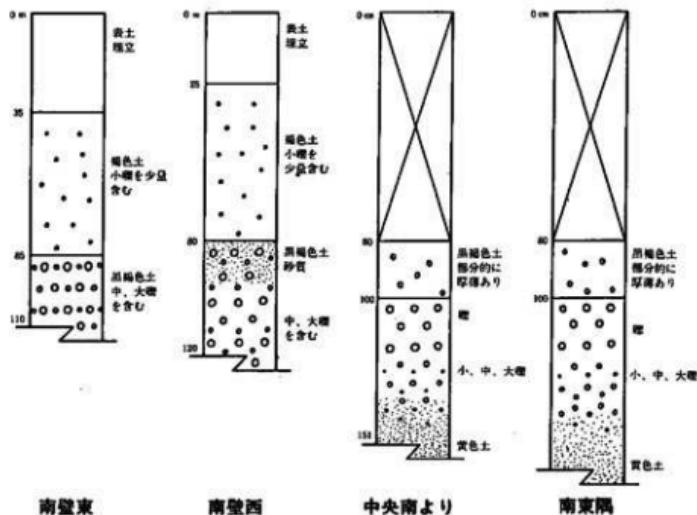
第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境

1. 位置と地形

本遺跡は松本市山辺中学校の校地内（校舎間・標高615m）にあり、薄川扇状地氾濫原の扇央に位置している。西流する薄川の現河床との至近距離は南へおよそ900mである。遺跡付近の地形形成に關係を持った氾濫や旧河床の扇頂の南方付近との距離は南東2000m前後（N-60°-W）である。地形面の平均傾斜はおよそ $\frac{25}{1000}$ で、平地ではやや急な方である。地下水の等深線は冬600m、夏は600mを越える。これをおよそ深井戸での自然水位でみると、県ヶ丘高校（-）10.05m、懇親会松本水道局（-）8.7mで扇央の性格を示している。

もともと荒町～北小松間は、南方付近を扇頂とする氾濫や旧河床が記録に残されたり、推定されるところで、現在でも山辺小学校付近から北小松に向う段丘崖は明りようである。荒町・兎川寺・荒町・北小松など左岸一帯は、氾濫原の堆積物である砂礫・土壌で埋められている。



第2図 地層断面図

2. 遺跡の立地と堆積層

発掘地の堆積層は上部から表土（埋立）、褐色土（畑土）、黒褐色土、礫層となっている。第2図は遺跡内の地層を示したものである。これによると表土は学校建設当時の埋立、褐色土層は埋立前の表土で、かつて桑畠などの作土となっていたものである。褐色土層の下層の黒褐色土層は、さらにその前の時代の植生をもった表土（生活面）で、遺構はこの土層中につくられている。黒褐色土層の下の砂礫層は、径30cmにも及ぶ大礫を含む、砂、小・中・大礫の旧河床礫で、上部層と違い黄色を帯びている。遺構はこの中まで及んでいる。礫の形はすべて円礫・亜円礫である。褐色土層のものは 2×2 ・ 3×2 cmの小礫で、含まれる量は少ない。黒褐色土層のものは、 40×30 ・ 35×26 ・ 23×15 cmの大礫で、旧河床あるいは氾濫の状況が想像できる。地層（土層）中に含まれる礫の種類は安山岩・石英閃岩・緑色ぎょう灰岩・ヒン岩等の細・小・中・大礫で、堆積岩系統が見当たらぬい。いずれも薄川上流の岩石である。

遺跡は古墳時代のものといわれ、黒褐色土層から旧河床礫層に切り込んでいるところから、礫層の堆積後と黒褐色土層が表層であった時期に相当すると考えられる。地層の堆積の順序を示すと次の通りと考えられる。

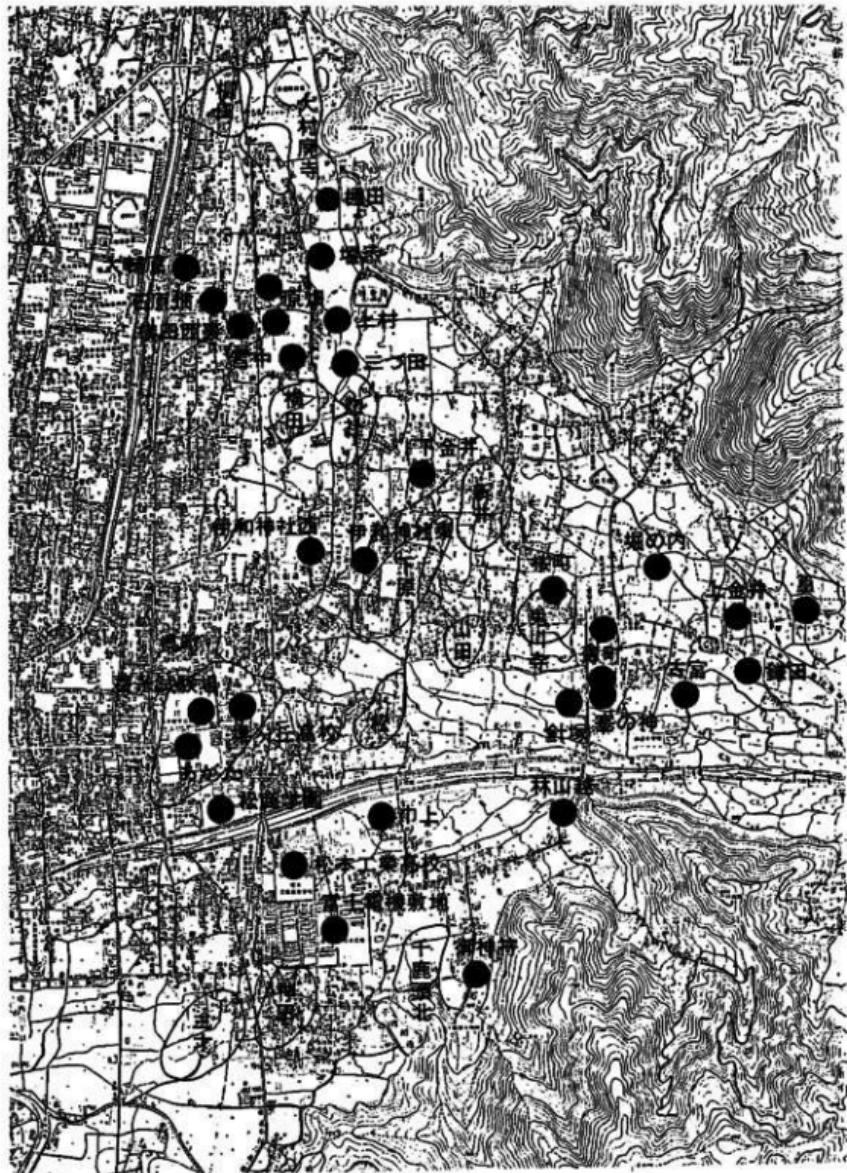
1. 砂礫層の堆積 旧河床礫

2. 黒褐色土層の堆積 植生と生活面 遺跡面

3. 褐色土層 遺跡を覆う

4. 表土 埋立土砂

なお地層の傾斜は $3 \sim 5^\circ$ 、走向はN-70°-Wであった。



第3図 周辺道路

第2節 周辺遺跡

本項については既刊の報告書の再掲と新たに発見された里山辺地区及び其の周辺の隣接する遺跡の一部を記述したい。

薄川水系—主として本遺跡のある里山辺・清水・県・埋橋地帯は、薄川の度重なる氾濫によって急速に堆積した扇状地で、薄川を挟んで南北に広がって、縄文（早）～中世まで各時代に涉って存在し、また時代の重なりが顕著である。

縄文時代 薄川右岸地帯には針塚(+)～(回)、塙の内(回)、上金井(+)、古宮(+)、薄町(+)、堂前(+)更に矢崎、下原、下金井伊和神社付近からは打斧などの石器が表採されている。尚塞の神からは晚期土器が採集されたと伝えられているが、出土地点は未確認である。清水からは石棒が出土し、旧四谷からは中期後半の完形土器が出土し、埋橋からも石棒、凹石が出土している。他方薄川左岸地帯は山麓に大嵩崎(+)、林山越(回)、御神符(+)が点在し、林山越遺跡からは完形の石棒が2本出土している。

弥生時代 薄川右岸地帯では鎌田(回)、針塚(+)、伊和神社西(回)、下って清水(+)、蚕糸試験場(回)、あがた(+)が在り、針塚では昭和57年の調査によって中期初頭の再葬墓が確認され、遠賀川系を含めて中期条痕文壺棺14ヶが発見された。又あがたは昭和55・59・60年の調査によって弥生の集落が確認され、焼失家屋、石器工房址などが発見された。又薄川左岸地帯では富士電気敷地内(+)回がある。

古墳時代 薄川右岸地帯の山麓及び山腹には人穴1・2、藤井1・2、オボケ、小丸山、山田入、平地では上金井、古宮、猫塚、荒町1・2・3、北川原屋敷など円墳、円・方形積石塚の存在が伝えられ、更に雁金池の東仙屋根上にも破壊された古墳があり、周囲の地から土師器片が採集されている。県地区には県1・2が残されている。小丸山古墳からは、大正8年の発掘により、直刀、玉類、金、銀環などの出土があり、更に薄川左岸地帯には、山麓に御神符、平地では直刀、轡、管玉、劍などの出土した巾上古墳がある。以上述べた古墳は既に煙滅したものが多く全容を窺い知るものには数基に過ぎない。また古墳時代集落として確認された遺跡は前回までの調査で住居址、土師器須恵器の出土をみた本遺跡と、同範囲内と考えられる美里町大田五六氏宅地内で昭和51年に発掘された石組みカマドを有する住居址と出土した土師器壺3ヶなどである。其の他遺物のみの出土地は桜町、湯の原、新井、あがた、県ヶ丘高校、薄川左岸地帯では御神符、富士電気敷地内などが知られている。尚清水小学校西南の（小型八稟鏡）、埋橋松商学園（瑞花双鳥八稟鏡）などが伝えられている。

奈良、平安時代 この時代となると遺跡の数はとみに増し、しかも弥生時代との重なりがめだつて来る。薄川右岸地帯は上金井、塙、鎌田、塙の内、塞の神、針塚、兎川寺、山田、桜畠、荒町、下原、下金井伊和神社付近、清水セブンイレブン、県ヶ丘高校、あがた、蚕糸試験場、松商学園と連綿と存在し、塙からは灰陶器碗、皿、桜町からは墨書き土器などが、直春一氏、山崎治男氏によって発見されている。あがた、県ヶ丘高校からは、綠釉、古瓦、住居址が確認され、特にあがたか

らは彫金釦子が出土した。他方薄川左岸地帯は、山麓の大嵩崎、平地では千鹿頭北、南小松、富士電機、松本工業高校、神田遺跡へと続いている。松本工業高校では、昭和53年の調査では須恵器、宋銭なども出土し、過去に古瓦の出土も見た。其の他の中世の遺物としては上金井、兎川寺、荒町遺跡などが知られ、現教文センター敷地内で昭和20年に発見された開元通宝、洪武通宝、永樂通宝を含め、淳任元宝、皇宋元宝などの宋銭3貫目が出土、荒町より出土した二耳壺がある。

女鳥羽川、湯川水系、女鳥羽川と湯川とによって北東から南西に傾斜した扇状地帯には、大村、横田、惣社の各遺跡が連続としている。この地域でもやはり各時代が重なり合っている。

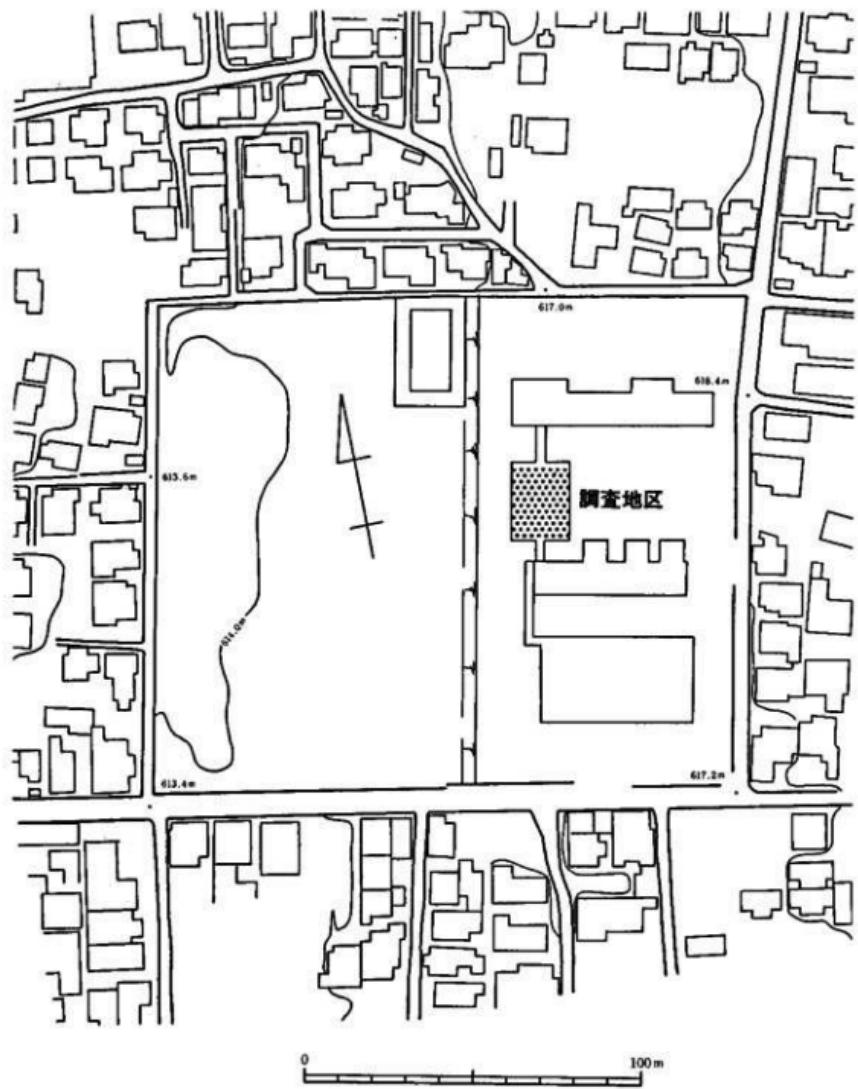
縄文時代 最近の市街化による区画整理、下水道工事などの開発により、特に大村神社南部、西部などの遺物の発見があいつぎ、破壊が進行している。原畠(中)(中)、宮の下(中)、大輔原(中)(中)、石原畠(中)、立石(中)(中)、花畠(中)、惣社等がひしめいている。特に原畠などは昭和55年の発掘調査並びに其の後の発見など合わせて敷石住居、大形石匙などの石器セット、黒曜石貯蔵穴、中期土偶、壙の内注口、コッペパン状土製品などなど多様な縄文遺物が出土している。又雪中では埋甕として3ヶの曾利III式深鉢が発見されている。

弥生時代 大村塚畠(中)(中)、原畠(中)、屋敷添(中)、棚田(中)等があり、横田地区では県営住宅東(中)(中)がある。尚棚田からは弥生土器に伴い炭化米の出土があった。又場所的に浅間妙義山の墳丘の土に含まれた弥生土器との関連性が窺える。惣社伊和地区では惣社伊和神社宮北の弥生(中)が調査で出土している。

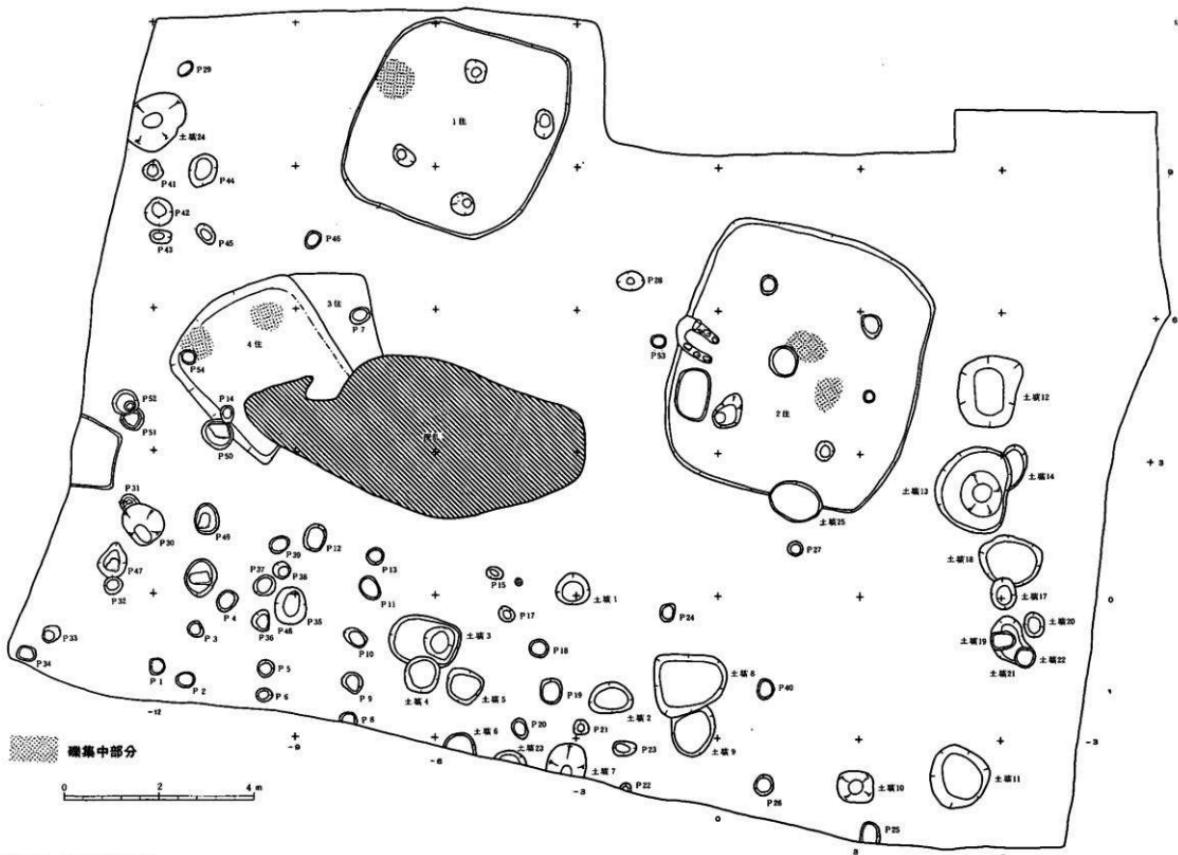
古墳時代 大村、南浅間、横田、惣社地帯には僅か、5基を数えるのみ、大村新切、玄向寺(桃仙園)、南浅間国司塚、横田西裏、惣社車塚古墳である。桃仙園古墳は山腹で甲冑、直刀、剣の出土が伝えられているが横田西裏古墳と共に今は消滅している。国司塚は径11m、高さ1.5mの円墳で、惣社車塚では、直刀、剣、土師器の出土が伝えられている。大村新切古墳は昭和30年に破壊されたが、運び出された石材30個により積石塚の可能性が強いと云われている。遺物の散布地はやはり車塚周辺が多い。

奈良、平安時代 分布は濃密で大村堂田、新切、赤田、寺田、くね添、棚田、屋敷添、大輔原、原畠、国司塚、クルワ畠、宮下、前田、堀添、塚畠、立石、花塚、遣添、塚田、玄向寺、三づ田、上村、雪中など連続と存在し、塚畠からは平安期の鍛冶遺構が発掘されて、斧、鎌、銅のかたまりが出土し、信大にて分析済みである。横田地区では塞の後、念仏寺、五反田、西裏、惣社地区では合体的に出土を見たが特に伊和神社西側が濃密である。詳細については分布調査を行なった推定信濃國府(2)を参照されたい。尚土器の出土は大村堂田、棚田からそれぞれ出土している。尚中世陶器は、畠地へはいれば必ず一点は採集できる。以上里山辺地区については山崎治男氏、大村地区については横田作重氏の御教示を受けた。

参考文献 茨野史地名書、推定信濃國府第2次調査報告書
松本工業高校調査報告書、松本市惣社宮北遺跡報告書



第4図 調査地区範囲図



第5図 調査地区全体図

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

本遺跡は松本市の東側山辺谷の入口、里山辺地区に所在し、薄川と泉川などの影響を受けた地形上に位置する。今回の調査地は、山辺中学校敷地内にあり、中学校の改築工事に伴い、59年度より調査され、本年が3回目となるものである。この山辺中学校敷地内は下原遺跡のほぼ中央に位置するものと見られており、以前から遺物の出土が知られていた。旧校舎の建設時やプール建設時に出土した遺物が当中学校に長らく保管されていたが、近年建てられた山辺歴史民俗資料館に移管され展示保管されている。時期は古墳時代の遺物が中心で、奈良・平安時代の須恵器、土師器等の出土も見られる。調査地区は管理棟を建設する400m²が対象となり、この内旧校舎の基礎部分にかかわらなかった約350m²を調査した。原地形は東から西側へかけて緩やかな傾斜面になっていたため、旧校舎建設時の整地用埋土が調査地区ほぼ全域に入っていたので遺構検出面までが比較的深く東側で80cm、西側で1m程の深さであった。埋土の厚さは厚いところで60cm、薄いところで30cm程度である。遺構は煙（くわ烟）当時の耕作や学校内のゴミ穴等により破壊や擾乱を受けており残存部分がわずかなものが多い。検出面は基本的には黄褐色土であるが、調査地区南壁で確認すると黒褐色土より掘り込まれている。今回の調査で確認された遺構は竪穴住居址4軒、掘立柱建物址1軒、土壙23基、ピット54基である。次に調査された遺構ごとに概要を記述したい。

竪穴住居址

4軒が確認された。第1号住居址は北側が旧校舎の基礎部分にあたったため不明な部分もあったがほぼプランを確認することができた。上面が確認されていて残存が少なかったため遺物の出土も少なく土師器壊、甕片等が出土したのみである。第2号住居址は最も残りが良く、遺物の出土も多かったが破片が多く、完形に近いものは土師器甕のみである。第3・4号住居址は上面がほとんど破壊されていて床面が確認されたのみであった。しかも東側はゴミ穴により擾乱されており全容は不明である。第4号住居址は第3号住居址に切られている。

掘立柱建物址

確認されたものは1軒のみである。柱穴内に礎石を持ち、1間×2間の小規模のものである。

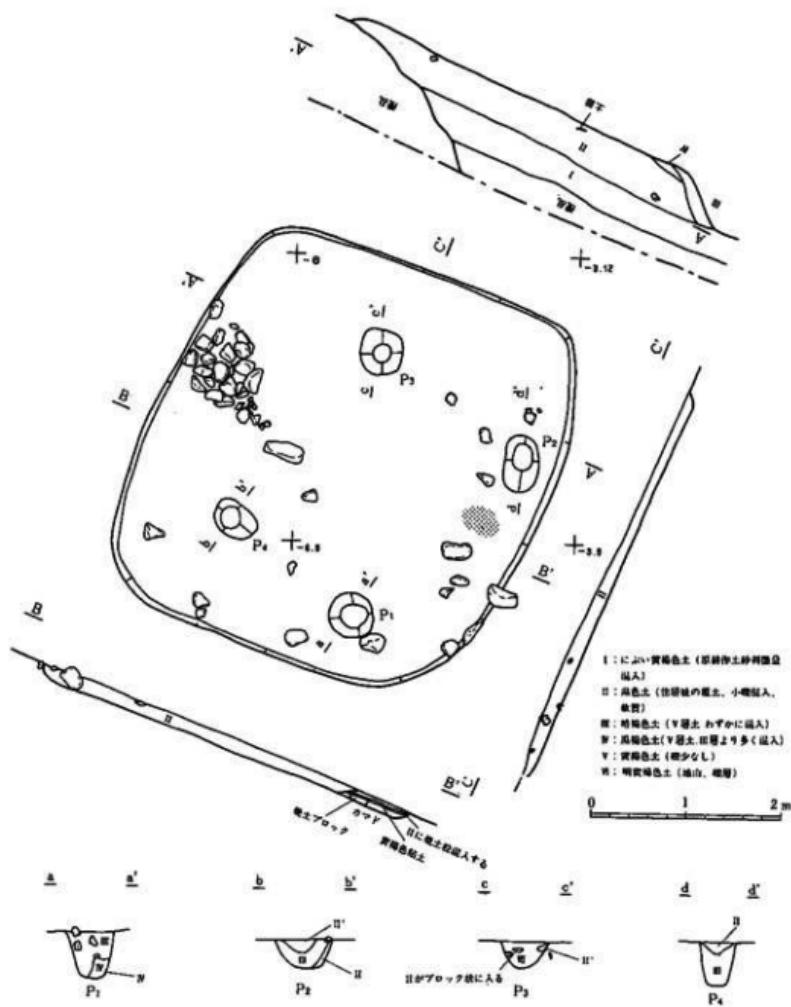
土壙及びピット

土壙は23基、ピットは54基確認された。

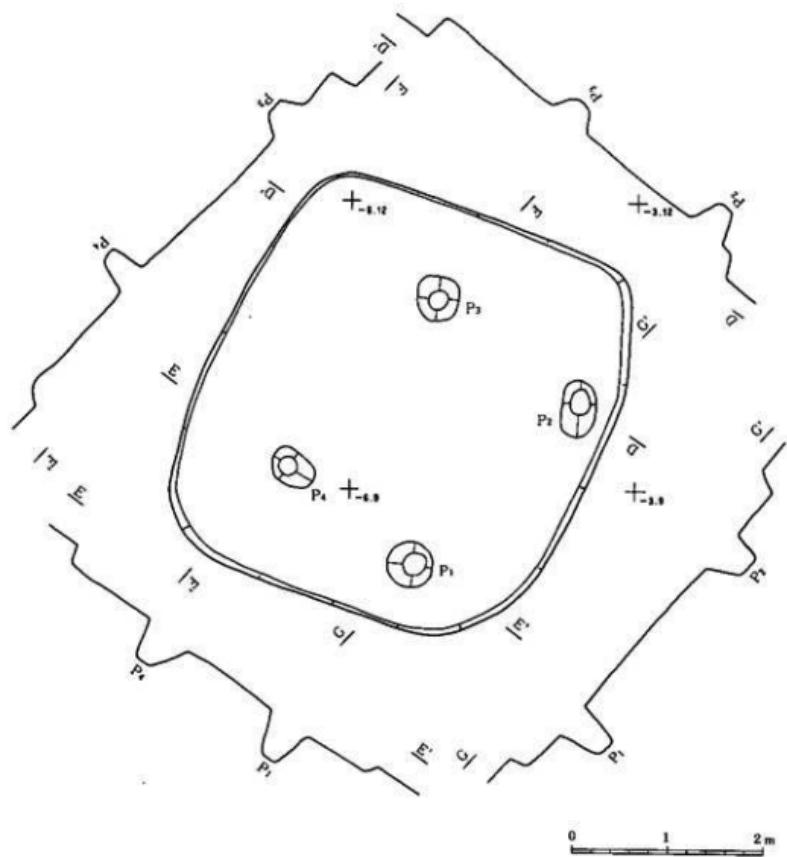
第2節 遺構

1. 第1号住居址

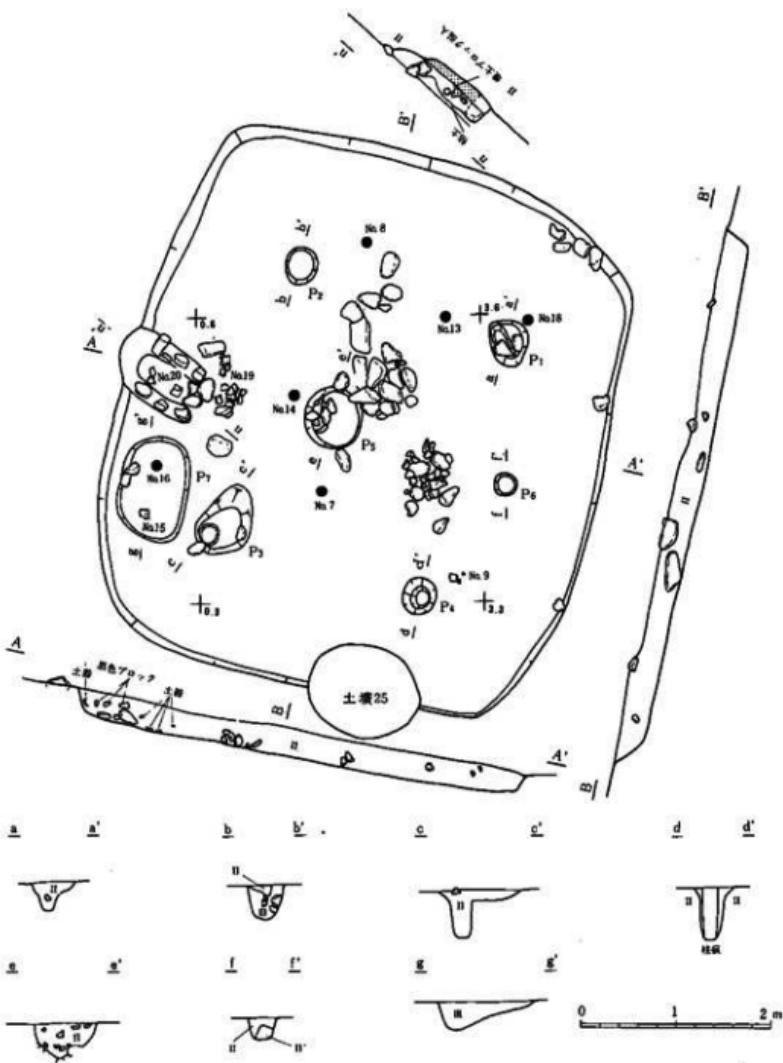
本址は調査地区の北側西寄に位置する。当初南側のみだけ確認されたのであらためて北側を排土して再検出により全容を確認した。この北側部分には、旧校舎の基礎部分がかかっていた場所であるため一部には床面付近まで搅乱が入っていた。また北壁側のプランも一部破壊されている。平面形状は隅丸の方形を呈し、規模は南北4.3m、東西4.2mで、面積は18.06m²を測る。壁の残存高は耕作、学校建設によりかなり破壊されており14cm程しかなかった。主軸方向はN-75°-Wを示す。2回目の排土前に北壁の土層の観察によると旧校舎建設時の埋土下に原耕作土が約30cmほど見られその直下の黄褐色土層より住居址の掘り込みが見られる。住居址は地山の礫層を10cmほど掘り込んで構築されている。覆土は1層で軟かく小礫が混入する黒色土である。床面は地山の礫層で部分的に堅いところもあるが全体的に軟質である。柱穴はP₁からP₄まで確認されている。形状は円形及び楕円形で、規模は50cm、深さは40cm前後を測る。柱痕は確認できなかった。カマドは東壁ほぼ中央にあったと思われる。袖石等の構築物は破壊されていて全容は不明であるが、床面に焼土と、わずかな粘土が確認できた。その他に西壁中央やや北寄の床面に径80cmの円形で集石が確認された。内部及び縁辺部には本址に伴う遺物が若干出土しているが、本調査地内からは同じように集石を持つ土壙が検出されているので本址に伴う遺構かどうかは不明である。遺物の出土についてはほとんどが破片で図示したものは4点のみである。出土量は土師器片2,183g、縄文土器片101gの合計2,284gで量は比較的少なかった。



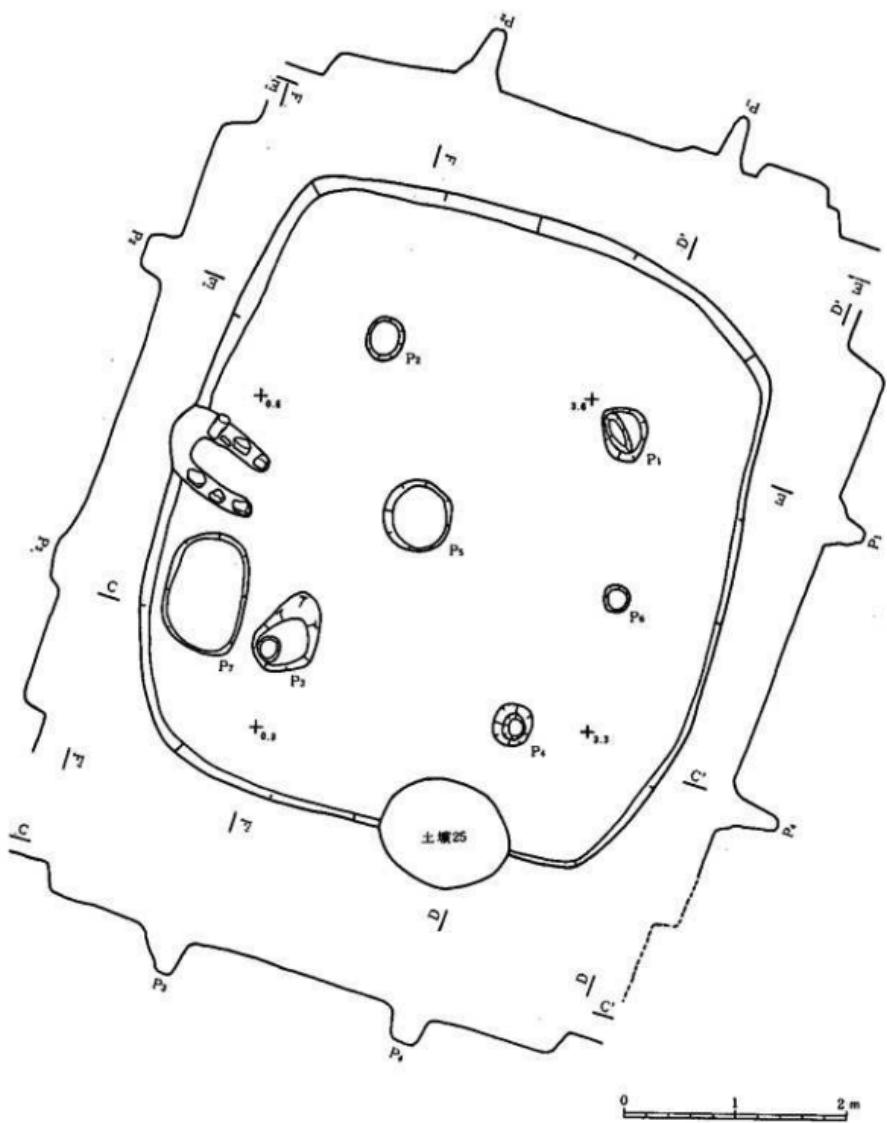
第6図 第1号住居址（1）



第7図 第1号住居址（2）



第8図 第2号住居址(1)



第9図 第2号住居址（2）

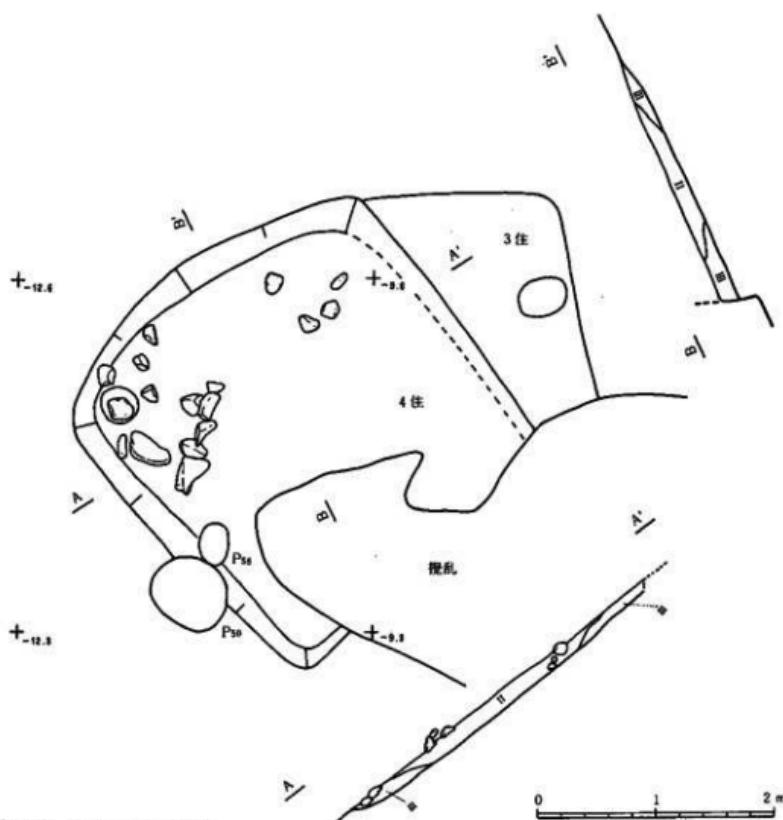
2. 第2号住居址

本址は調査地区の中央北東寄に位置し、調査住居址中最も残りが良いものである。南壁部分を土壤25cmに切られている。平面形状は南北に5.7m、東西に5.2mを測る長方形に近い方形で、壁の残存高は30cm前後、面積は29.64m²を図る。主軸方向はS-70°-Eを示す。覆土は1層で小礫が混る黒色土であり、床面は地山の礫層上で一部堅いところもあるが全体的に軟質である。柱穴及びピットはP₁からP₆まで確認された。この内主柱穴はP₁からP₄である。形状はP₂、P₃が円形、P₁、P₄が不整橢円形である。規模は40~80cm大、深さが27~50cmを測る。他にP₅とP₆があり、P₅は主柱穴のほぼ中央にあり径60cmの円形を呈し深さ34cm程を測る。P₆はP₁・P₄の中間にあり円形で径20cm、深さ23cm程を測る。P₅・P₆も柱穴であろうと推測する。P₇は貯蔵穴で長さ100cm、幅70cm、深さ15cm前後を測る橢円形である。カマドは西壁ほぼ中央に位置し、構築材料は石組に粘土である。このカマドは西壁に対して直交しておらず、カマドの中軸線は左(南側)側へ104°ふれている。P₈の北側及びP₉の西側2ヶ所に集石が確認され、前者の石は大きく後者は小さい。第1号住居址同様に本址に伴うものかどうか不明である。遺物の出土状況はカマド内及びカマド前、P₇の周辺、P₈の周辺が多い。土師器壺、鉢、甕がある。又覆土内より出土した土師器高壺片8は、脚部と壺部上部を欠くが欠け口が磨いて平らに整えられており、高壺として使用できなくなつた後他に転用されたものと思われる。出土量は土師器8,646g、須恵器4g、縄文土器17gの計8,667gである。

3. 第3・4号住居址

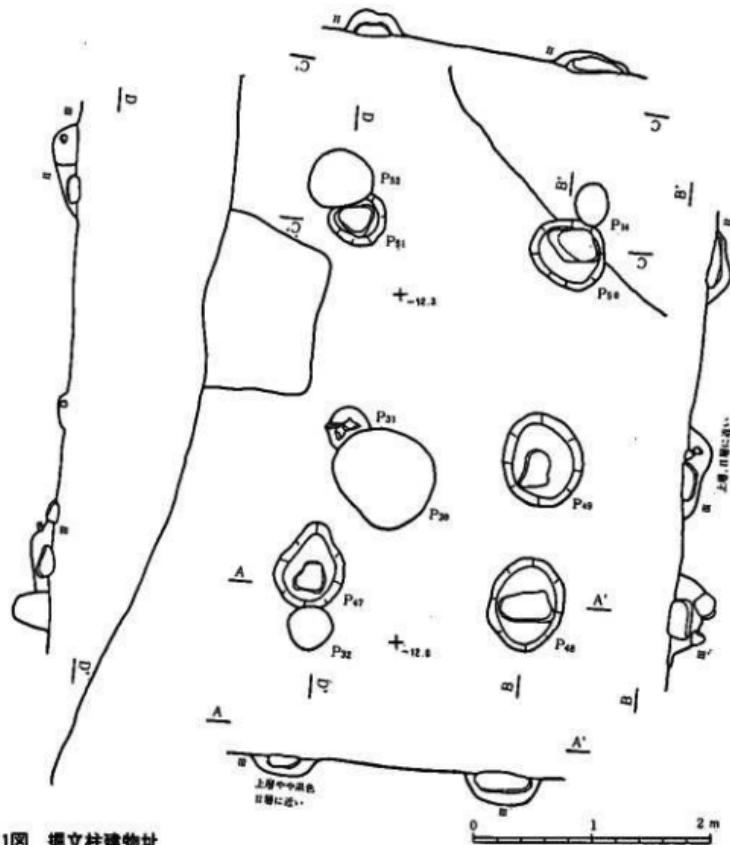
本址は調査地区の西側中央に位置する。両址ともに上部は削られてほとんど床面が残存するのみである。しかも東側は学校当時のごみ穴に擾乱されており、全容は不明である。特に第3号住居址は大半を第4号住居址に切られており、床面は第4号住居址より高いので壁の立上りはほとんど確認できなかった。

第4号住居址は3.2×3.2mを測る方形で、壁の残存高は25cm程である。面積は10.24m²を推定する。覆土は他の住居址と同じく、小礫が混入する黒色土、床面は黄褐色土で堅い。南西及び北東角に集石が確認されたが住居址に伴うものかは不明である。遺物の出土は少なく図示しえるものはない。



第10図 第3・4号住居址

住居址番号		1住	2住	3住	4住
位 置	緯 度	-3° - 9	6° - 3	-6° - 9	-9° - 12
	経 度	12° 6	9° 9	9° 3	9° 3
坐 標	N - N' - W	S - N' - E	N - N' - W	N - N' - W	
面 積	方 形	方 形	(方 形)	(方 形)	
面 積	18.06m ²	29.64m ²			
大 き さ (m)	4.3 × 4.2	5.7 × 5.2	() × ()	3.2 × (3.4)	
構 造 高 (m)	14	30	19	14	
ビ ト	柱 穴	4	7	1	1
	その 他の 特 徴	(1)	2		
カ ラ ド 状 態	位置	東壁中央?	西壁中央		
	地 盤	硬 土	壁外張出		
遺 物 番 号		Wn 1-4	Wn 5-21-26		
備 考		土師 2.183kg 陶文 101kg	土師 6.546kg 陶文 4kg 瓦 17kg		土師 340kg



第11図 捩立柱建物址

4. 捩立柱建物址

本址は調査地の西側南寄に位置し、P₃₁、P₃₇、P₃₈、P₃₉、P₄₀、P₄₁の6本で構成する。P₃₈は第4号住居址を切る。規模は1間×2間で南北に長く長軸方向はN-7.5°-Eである。柱穴内に20~40cm大で上面平らな石を持つ。P₃₄だけは10cm大の小礫のみで平石はない。P₃₀に切られているので抜き取られた可能性がある。柱穴の形状は橢円形に近い円形でP₃₇のみ不整円形である。

5. 土壌・ピット

土壌及びピットの区別は大きさがほぼ50cm以上のものを土壌、それ以下のものをピットとした。この調査で確認された土壌は23基である。出土状況は調査地区の東側及び南側に多く、調査地区的南壁にかかるものがあり南側の調査地区外へ広がっていると思われる。規模は小さいもので土壌21の50×40cm、大きいもので土壌13の180×136cmである。形状は不整形も含めて楕円形が多い。土壌内部の状況は集石状に礫を持つものが多い。礫の大きさは10~70cm大で、特に土壌11、12、13には大きなものが多く、重なり合っており埋土より礫の方が多い状態であった。遺物の出土は少なく、図示しえるものは土壌11より出土した青磁碗片24のみである。他は土師器片が多い。

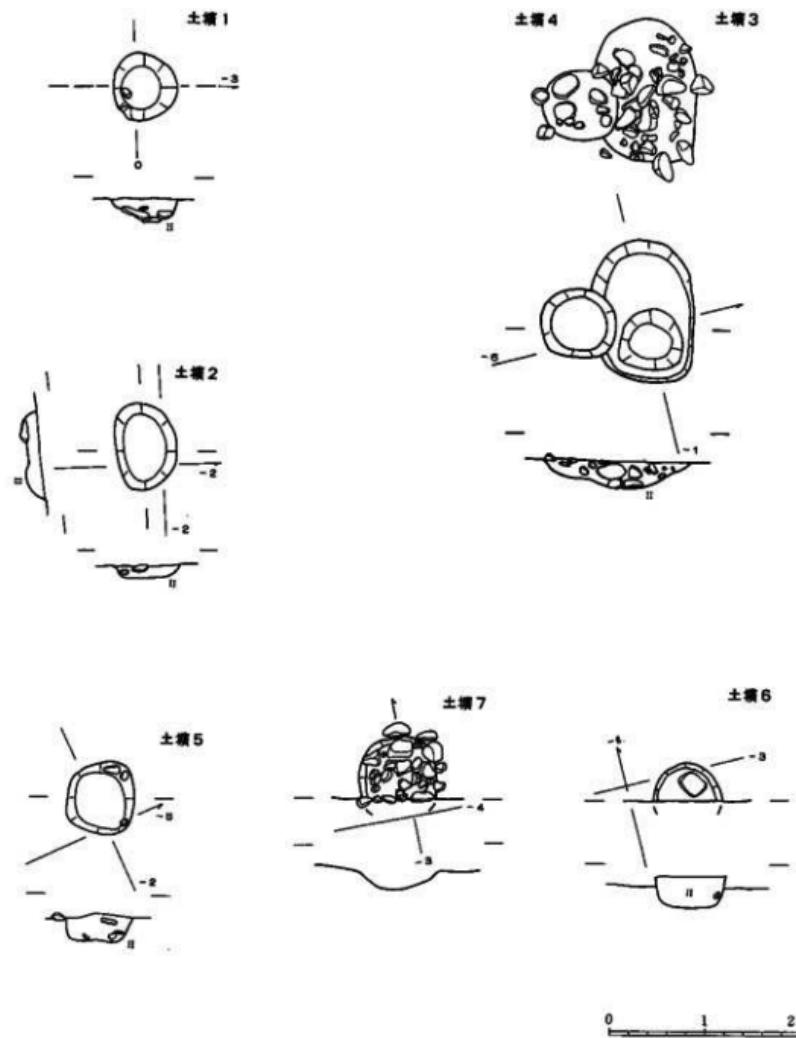
次にピットであるが、54基確認された。出土状況は西側及び南側に多い。土壌と同様南側地区外へ広がるものと思われる。54基の内P₃₁、P₄₇、P₄₈、P₄₉、P₅₀、P₅₁については掘立柱建物址である。他にはP₅、P₆、P₈~P₁₁、P₁₃、P₃₆~P₃₉が可能性があるが全容があきらかでないため不明である。遺物については出土量は少量でほとんど小破片であり、P₄₆より出土した縄文土器片とP₄₈より出土した土師器皿片の2点のみである。

土 壤 一 覧 表

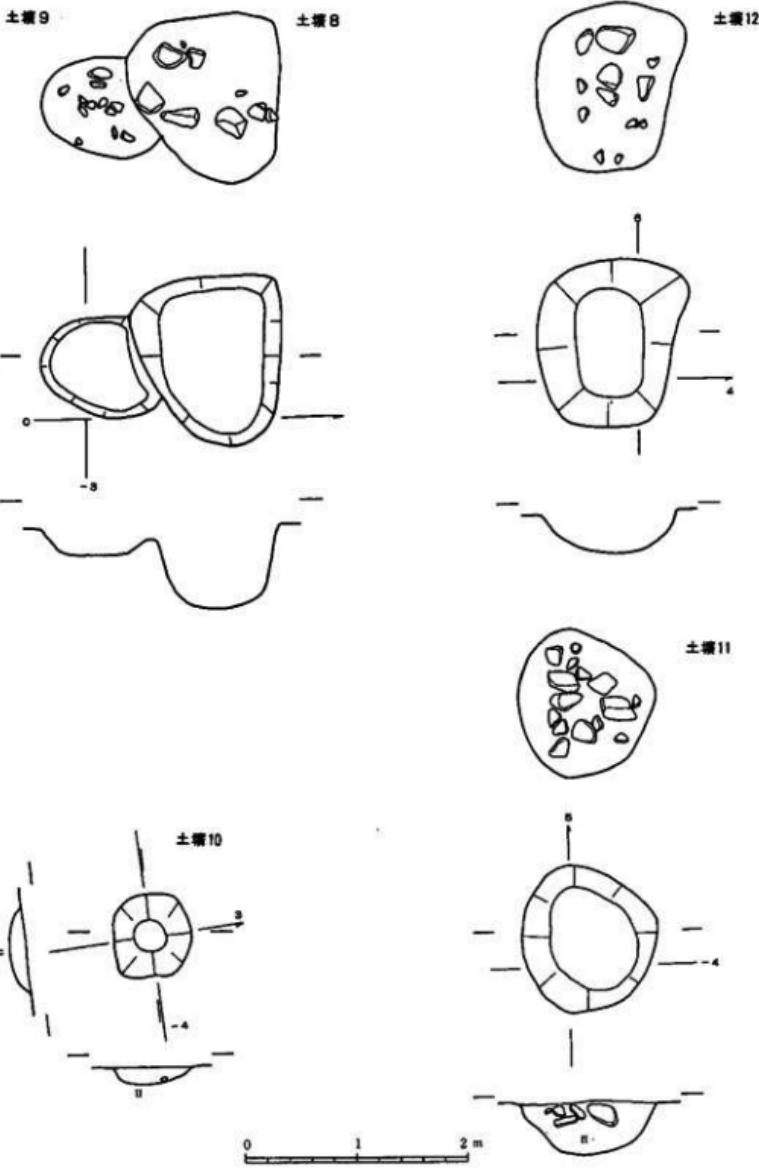
番 号	位 置	平 面 形	大 き さ (cm)	理 存 高 (cm)	出 土 遺 物	備 考	
						経 緯	横 軸
1 - 3	0	不整円形	28×70	22			
2 0. - 3	0. - 3	不整楕円形	92×74	17			
3 - 6	0. - 3	楕丸長方形	146×104	28		土壌4に切られる	二重底 集石状
4 - 6	0. - 3	円 形	径 80	20	土師1	土壌3を切る	集石状
5 - 3. - 6	0. - 3	不整方形	78×70	28			
6 - 3. - 6	- 3.	(楕円形)	70×()	33		地区外にかかる	
7 - 3	- 3. - 6	楕丸方形	62×()	18		集石状	
8 - 3	- 3. - 6	楕丸長方形	150×124	98		土壌9を切る	集石状
9 0. - 3	- 3	楕円形	110×90	24		土壌8に切られる	集石状
10 3	- 3. - 6	楕丸方形	74×70	16			
11 3. 6	- 3. - 6	不整円形	134×124	48	青磁 Na24	炭化物(木片)	集石状
12 6	3. 6	楕丸長方形	148×122	38	土師2	集石状	
13 3. 6	0. 3	不整楕円形	180×136	70	土師2	土壌14を切る	二重底 集石状
14 6. 9	0. 3	椭円形	96 (50)	46		土壌13に切られる	集石状
17 6	0	楕丸長方形	132×98	42		土壌18に切られる	集石状
18 6	0. 3	椭円形	64×56		土師2	集石状	
19 6	0. - 3	不整楕円形	100×70	24	土師1	土壌21. 22に切られる	
20 6. 9	0. - 3	椭円形	52×40	24			
21 6	0. - 3	楕丸長方形	50×40	28	土師1	土壌19を切る	
22 6. 9	0. - 3	円 形	径 44	12	土師1	土壌19を切る	
23 - 3. - 6	- 3. - 6	(楕丸方形)	68×()	28		地区外にかかる	
24 - 9. - 12	9. 12	不整楕円形	(158)×126	34.5		集石状	
25 0. 3	0. 3	椭円形	120×82	24	土師3	2住を切る	

一覧表

番 号	位 置	地 質	平 面 形	大きさ (m)	厚 さ (m)	構 造			火 き さ (m)	高 度 (m)	標 高
						手 山	輪 島	圓 錐			
1	-9, -12	0, -3	不整円形	36×32	16				31 -12, -15	0, 3	円 形
2	-9, -12	0, -3	楕円形	36×32	12,5				32 -12, -15	0, 3	円 形
3	-9, -12	0, -3	不整円形	36×30	11				33 -12, -15	0, -3	不整円形
4	-9, -12	0, -3	不整円形	48×38	12				34 -12, -15	0, -3	楕丸形
5	-9, -12	0, -3	円 形	36	22				35 -9, -	0	楕丸形
6	-9, -12	0, -3	円 形	34×30	18				36 -9, -12	0, 3	不整円形
7	-6, -9	6	椭圆 形	44×32		3面内のピラミッド?			37 -9, -12	0, 3	不整円形
8	-6, -9	0, -3	(円 形)	36×34	12	地区外にかかる			38 -9, -12	0, 3	円 形
9	-6, -9	0, -3	不整円形	44×40	29	無石状			39 -9, -12	0, 3	椭圆 形
10	-6, -9	0, -3	不整円形	50×34	26,5				40 -9, 0	3	不整円形
11	-6, -9	0	不整円形	52×42	16,5				41 -9, -12	6, 9	不整円形
12	-6, -9	0, -3	椭圆 形	56×45	25	無石状			42 -9, -12	6, 9	不整円形
13	-6, -9	0, -3	円 形	34	19				43 -9, -12	6, 9	椭圆 形
14	-9, -12	3, -6	椭圆 形	36×26	17	4倍・P99E48			44 -9, -12	9, -	不整円形
15	-3, -6	0, -3	椭圆 形	34×26	6				45 -9, -12	6, 9	椭圆 形
16	-3, -6	0, -3	円 形	36	8				46 -6, -9	6, 9	椭圆 形
17	-3, -6	0, -3	椭圆 形	36×28	17				47 -12, -15	0, 3	不整円形
18	-3, -6	0, -3	円 形	36×34	24				48 -9, -12	0, 3	椭圆 形
19	-3, -6	0, -3	椭丸形	54×44	20	無石状			49 -9, -12	0, 3	椭圆 形
20	-3, -6	0, -3	不整円形	32×34	18				50 -9, -12	3, 6	(不整円形)
21	0, -3	0, -3	不整円形	30×32	16,5				51 -12, -15	3, 6	円 形
22	0, -3	-3, -6	円 形	26×30	12	地区外にかかる			52 -12, -15	3, 6	円 形
23	0, -3	-3, -6	不整円形	52×36	14				53 0, -3	3, 6	楕丸形
24	0, -3	0, -3	椭丸形	36×32	17				54 -9, -12	3, 6	円 形
25	3, -6	-3, -6	椭圆 形	56×44	11	地区外にかかる					4往内ヒトトガ?
26	0, -3	-3, -6	椭圆 形	48×38	20						
27	0, -3	0, -3	円 形	36	17,5						
28	0, -3	6, -9	椭圆 形	60×42	26						
29	-9, -12	9, -12	椭圆 形	36×22	27						
30	-12	0, -3	不整円形	38~77	47	無石状					

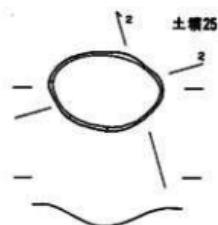
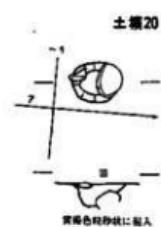
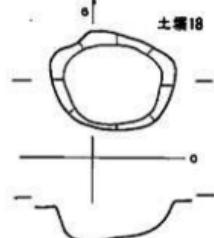
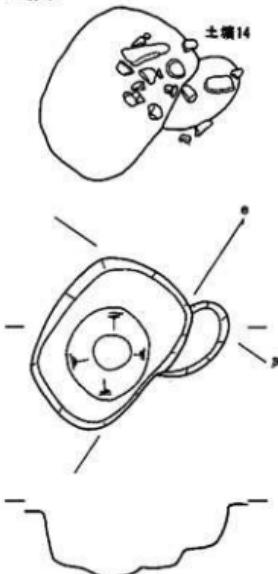


第12図 土 壘 (1)



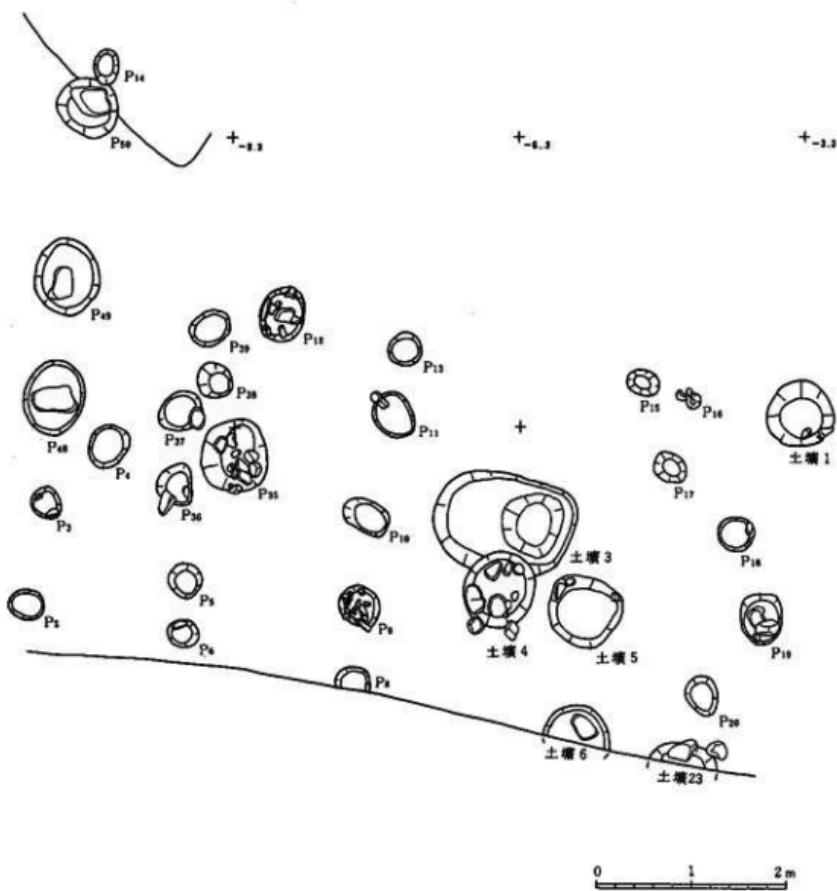
第13図 土 壤 (2)

土壤13

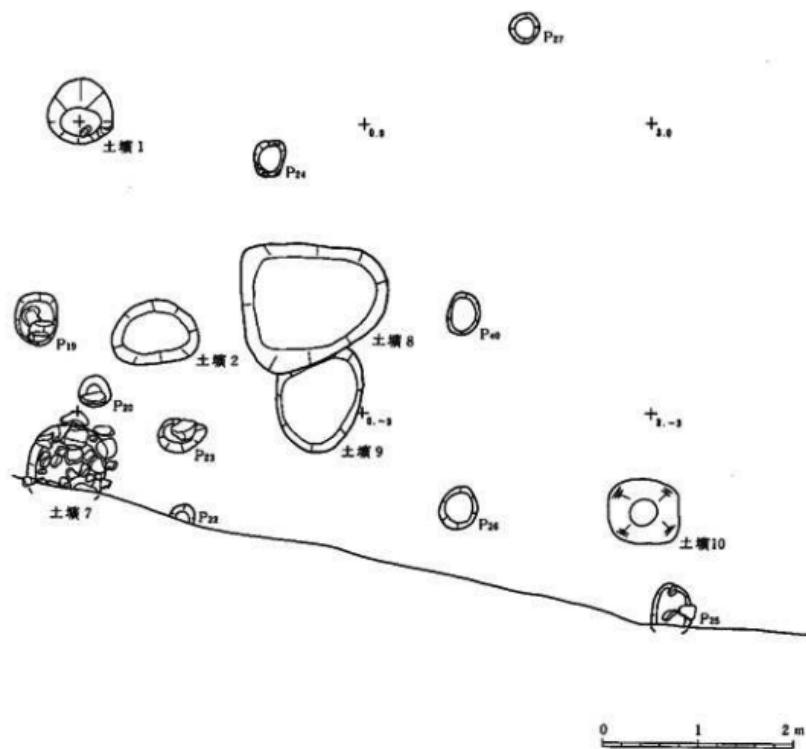


0 1 2 m

第14図 土 壤 (3)

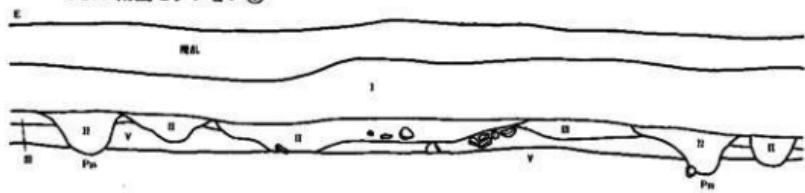


第15図 土 塵・ビット (1)

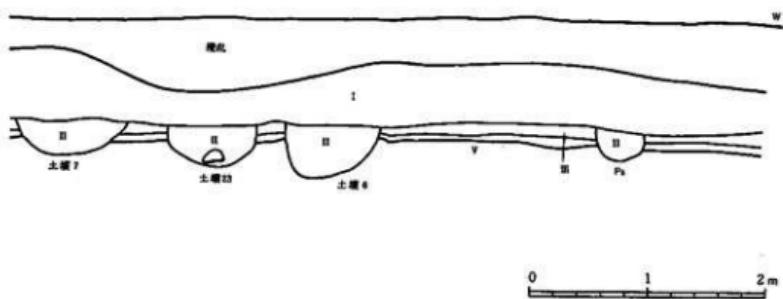


第16図 土壌・ピット (2)

SSH 南壁セクション①



SSH 南壁セクション②



第17図 南壁土層断面図

調査地内の造構及び壁面の土層は「新版標準土色帖」を参照し次のとおり統一した。個々の土層観察により特徴があれば、それぞれ記述することとした。

- I : 10Y R5/4 に近い黄褐色土
- II : 10Y R2/1 黒色土
- III : 10Y R3/3 暗褐色土
- IV : 10Y R3/2 黑褐色土
- V : 10Y R5/8 黄褐色土
- VI : 10Y R5/8 明黄褐色土

第3節 遺物

1. 土器

今回の調査で出土した土器は、土師器を主体とし若干の須恵器、陶磁器、縄文土器が伴っているが、全体としては量的に少なく、図示できたものは26点にすぎない。このため本遺跡の過去の調査で出土した土器を再録して（第20～22図）、これらも含めて本遺跡の土器の特徴について検討していくことにしたい。ただし、土器個々のデータについては、今回出土のものは観察表にまた過去の調査のものは各報告に示してあるため、ここでは細かく扱わない。

対象とする土器の出土地点と掲載図№は次のとおり。

昭和61年度（今回）調査第1号住居址出土品：第18図1～4

同上 第2号住居址出土品：第18・19図5～22

同上 その他からの出土品：第19図23～26

昭和59年度調査第1号住居址出土品：第20図27～38

昭和60年度調査出土品：第21・22図39～64

(1)土師器

①各器種の形態・手法上の特徴

壺（1・5～8・27～30）

外形の特徴としては、1)いずれも底部が丸底ないしは丸底気味になること、2)体部に稜をもつもの（1・6）とそうでないものがあり、3)さらに後者には体部の外形が、直線的に外開するものの（5・27）、半球形に内湾するもの（7・29・30）、その中間的なもの（8・28）があること、があげられる。成形・調整等手法上の特徴としては、1)いずれも口縁部に強いヨコナデが施されること、2)底部および体部下半の外面にケズリがなされるもの（1・5・6・8・28）があること、3)内面にヘラミガキが施され（1・5～8・27・28・30）、黒色処理をされるもの（5～8・27～29）があること、4)いずれもロクロによって成形・調整されていないこと、が多数共通して認められる。

鉢（9～11）

体部が半球状に内湾するもの（9）と、それより上方へ大きく立ち上がる体部と短く強く外反する口縁部をもつもの（10・11）の2者がみられる。いずれも口縁部を強くヨコナデされ、内面はヘラミガキと黒色処理が施されている。9の体部外面には不定方向のハケメが残されているが、食器類にハケメが残されるのは珍しい。

高壺（31・32・21）

壺部（31）、脚部（32）が1点づつ出土しているのみで、分類は不可能である。壺部は、体部と

底部の境に稜をもち、体部が直線的に大きく外開する外形をとる。また、内外面にヘラミガキが施され、内面は黒色処理がなされる。脚部は裾が大きくラッパ状に外反し、外面にヘラミガキが施され、内部はケズリにより調整されている。この脚部の成形は一回におこなわれたものであろう。なお、21は高环の环底部周辺を削り整えて皿状のものに転用した破片である。

壺 (36)

頸部内面に「く」の字形の若干の稜を有し、そこから緩く外反する口縁と、上半がやや張る胴部をもつ1点のみがある。手法上では内外器面のヘラミガキを特徴とする。

小形壺 (33)

直立気味に外反する口縁部をもち、内外面ともヘラミガキ、内面は黒色処理されるものが1点出土しているのみである。

壺 (3・4・12・13・15~20・37~47・64)

最も多くみられる器種で、外形のある程度わかるものは、いずれも長胴形を呈する。調整にハケメを用いてあるものとそうでないものに大別できるので、便宜的に後者を壺A、前者を壺Bとして記述を進める。

壺A 量的に主体を占めている。手法上からみると、いずれも口縁部を強くヨコナデされ、胴部はナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ等の調整で雑に仕上げられており、器肉が平均して1cm以上ときわめて厚い。外形上では、口縁部形態と底部に差異が認められる。即ち、口縁部では、頸部に「く」の字形の稜をつくるもの(3)とそうでないもの(12・13・37・38)の違い、底部では平底——木葉圧痕を残すものが多い——のもの(4・12・19・20・64)とヘラケズリ等により丸底気味にしてあるもの(37)の違いである。また全形が判明するものが少ないため明確ではないが、器高が、40cm位になる大形のもの(64)と25cm以内におさまるもの(12・37)の2者があるようで、特に前述の底部形態の差異はこの2者にある程度対応するかもしれない。

壺B 量的に少ない(15・44~47・63)。口縁部の外形に着目すると、厚手で頸部のくびれをもたず胴部に移行するもの(15)と、それに比して薄手で「く」の字形に強く屈折する頸部をもつもの(44・45?)の2者がある。前者は器肉の厚さ、調整の粗さから壺Aに通ずるところがみられるが、後者は全く異質である。編年上の時期的な隔りによるものと理解している。46・47・63の底部も後者に属するものと推定する。

小形壺 (14・34・35・48~50)

壺A同様、器面をナデ・ヘラナデ・ヘラケズリ等の調整で雑に仕上げているもの(14・34・35)と、器面調整にハケメがみられるもの(48~50)の、2者がみられる。前者は比較的器壁が厚い。35の底部には何らかの圧痕が残されている。後者の中で、49・50は器肉の厚さや調整の雑な点からみると、むしろ前者に似ており、その点では、内外面にハケメ

を持ち器壁が薄く丁寧に仕上げられている48は異質である。甕Bの一部と同様、時期的な違いによるものと推定している。

次に、全体を通してみると次のような手法上の共通点がある。

- 1)、いずれの器種も、成形・調整の各段階でロクロが使用されていない。
- 2)、口縁部のヨコナデの痕跡が明瞭に残る。
- 3)、器壁が厚い、特に甕類に著しいが、その他の器種にも厚いものが多い。
- 4)、比較的丁寧に作られる器種と、雑に作られる器種がはっきり区別されていてその差が著しい。
- 5)、丁寧に作られる器種は、内面のヘラミガキと黒色処理がなされるものが多い。

以上の様な手法上の共通点をもち、前述の如くの器種構成をなす本遺跡出土の土師器は、甕Bおよび小形甕の一部にみられた薄手のものを除き、近似する時期の所産と判断したい。層位的にみた場合も各住居址出土品についてはこの見解は妥当と言えよう。

(2)類例と年代観

松本平およびその周辺で、本例に類似するある程度まとまった報告例は少ないが、大町市借馬遺跡に好例がみられる。借馬の第VI期に分類されている住居址群出土品の环類、甕類の形態・手法が類似しており、それらに近似する時期が本例にも与えられよう。この借馬第VI期は出土した須恵器等から6C終末～7C前半の年代観が与えられている。次に、松本平からはずれるが、諏訪市金鋸場遺跡出土品にも類例が求められる。ここでは出土土器を2期に区分し、I期に6世紀後半葉、II期に7世紀前半葉という年代比定を行っている。この借馬、金鋸場の両例からみて、本遺跡出土の土師器の大部分は6C末～7C前半、古墳時代後期の所産と考えて妥当であろう。

甕Bと小形甕の一部にみられた薄手のものは、ハケメを多用する点などからみて8C代のものと推測する。

(2)須恵器

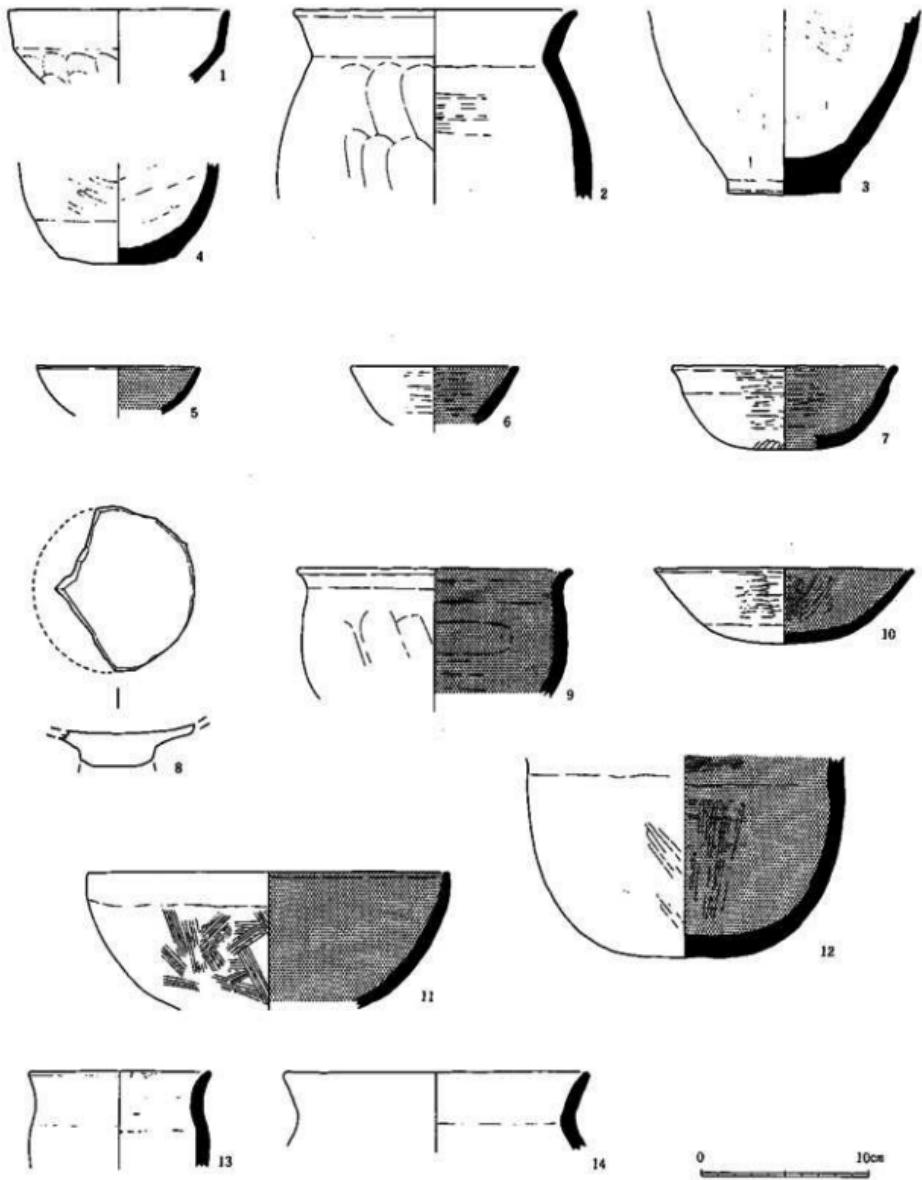
昭和60年度調査で少量出土しているだけである(52～62)。器種では、蓋(52・53)、有台环(54・56)、环(57～61)、瓶類の口頭部(62)がみられる。形態からみて、蓋、有台环と环の一部(60・61)は8C代のもの、また、57・58の环はそれより若干古いものと考えられる。57の底部はヘラ切り後ナデを、58は回転ヘラケズリを行っている。この須恵器の時期を先述の土師器と対応させると、8C代の須恵器は土師器甕Bと小形甕の一部にみられた薄手のものに伴う可能性が指摘できる。

(3)その他の土器

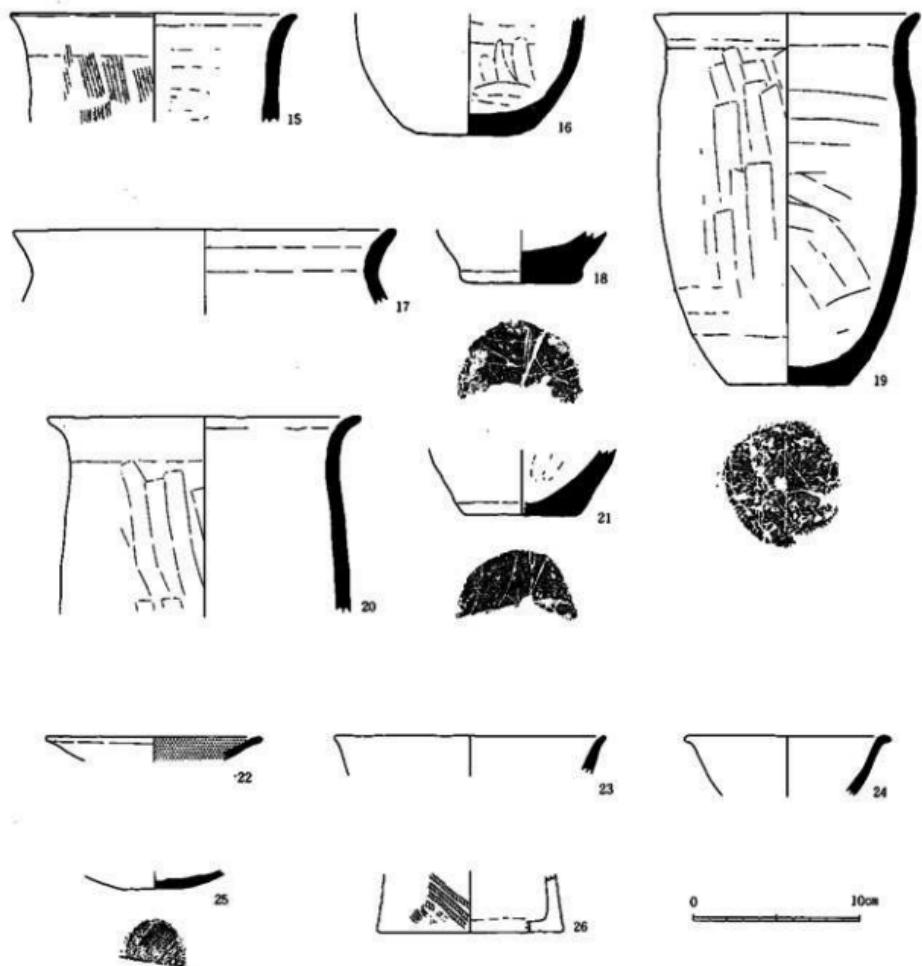
今回調査で縄文土器少量と青磁一片(26)の出土があった。図示した縄文土器は外形からみて前期末頃の所産と考えられる。

出土土器調査表

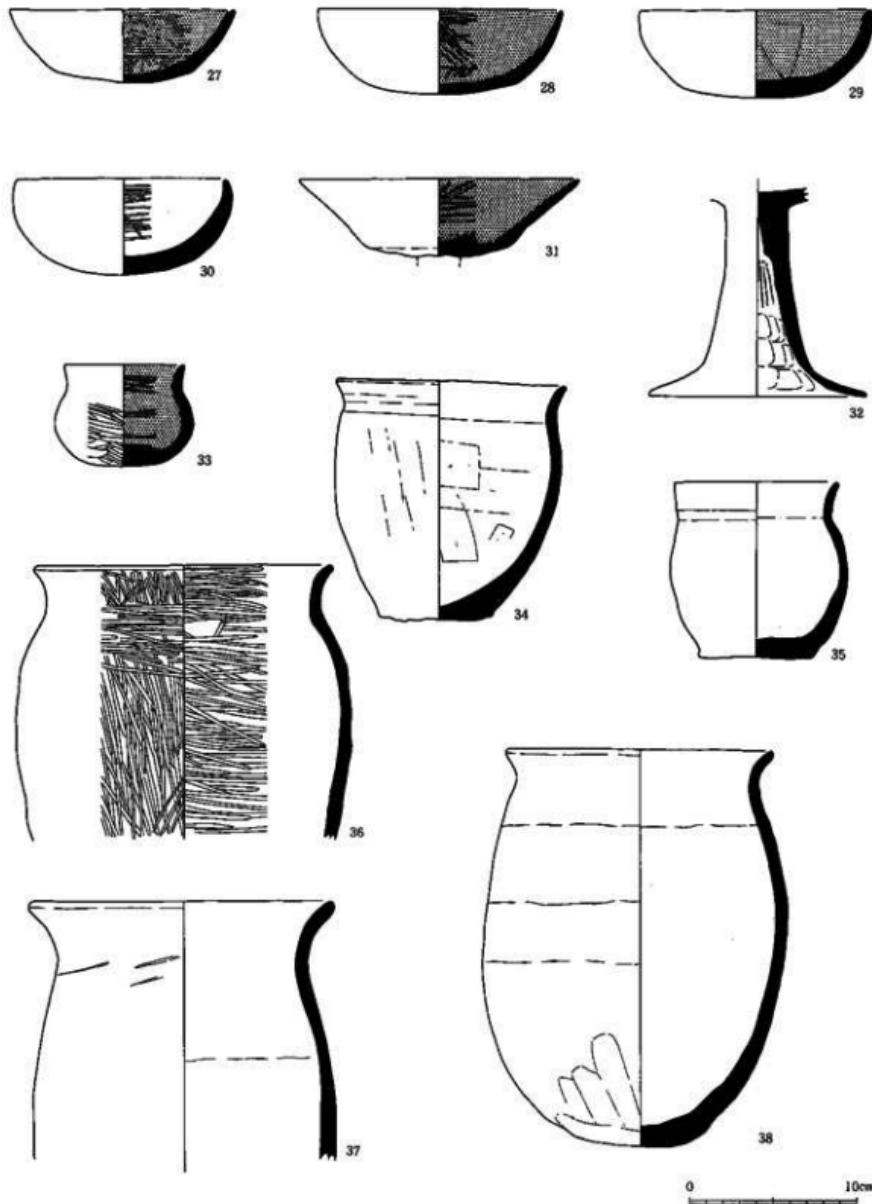
No.	出土地点	種別	形	寸	法(m)	規形	外	内	圖	成形・調節・仕上の特徴		備考
							直径	高さ	底	底	底	
1	1生灰面	土器	平	13.1	—	—	20	活	—	—	—	内面ヨコ方向カーブ引け、外縁下部へタケヅリ
2	1 生	住	盛	16.7	—	—	49.0	切	—	—	—	内面ハナ付・外縁カツギリ・口縁部ヨコナデ
3	1生灰面	〃	〃	—	6.7	—	42.8	—	光	基盤-底板	内面ヨコ方向カーブ引け、外縁下部へタケヅリ	
4	1 生	住	盛	—	(3)	—	23.5	—	光	基盤-底板	内面ヨコナデ・外縁カツギリ・底部ヘタケヅリ	
5	2住灰土	〃	环	9.7	—	—	6	人の形	明茶碗	黑(内底)	内面ハラミカギリ・外縁ヘリカギリ・口縁部ヨコナデ	
6	〃	〃	〃	9.9	平	—	12	活	—	黑	—	内面ヨコカギリ・外縁ヘリカギリ・底部タマリのちナデ
7	2 住	住	盛	13.2	—	—	68	切	活	實地-底	—	内面ヨコカギリ・外縁ヘリカギリ・底部タマリのちナデ・口縁部ヨコナデ
8	2住灰土	〃	环	—	—	—	94	井筒合掌・完	明茶碗	赤褐(朱)	内面ヨコカギリ・外縁ヘリカギリ	
9	〃	〃	棒	16.3	—	—	64	口縁はんの形	明茶碗	黑(内底)	内面ヨコ方向カギリのち棒くみカギリ・外縁ヘリカギリ・口縁部ヨコナデ	
10	2住P ₁ P ₂	〃	环	15.4	平	—	130	1/2	1/2	明茶碗-明茶碗	—	内面ヨコカギリ・外縁ヘリカギリ・底部タマリのちナデ
11	2 住	住	棒	21.6	—	—	210	口縁はんの形	明茶碗	—	—	内面ナデ・外縁ヘリカギリ
12	2住灰土	〃	〃	—	—	—	390	削面	活	—	—	内面ナデ・外縁ヘリカギリ・底部ヘタケヅリ
13	2 住	住	圆	16.7	—	—	54	1/2	—	活茶碗	活茶碗	内・外縁ヨコナデ・口縁部ヨコナデ
14	〃	〃	〃	18.1	—	—	51	活	—	明茶碗	—	内・外縁ナデ・口縁部ヨコナデ
15	〃	〃	〃	16.8	—	—	66	1/2	—	活	明茶碗	内面ナデ・外縁ヘリカギリ・口縁部ヨコナデ
16	〃	〃	〃	—	5.2	—	198	—	21	—	—	内面ナデ・外縁タマリのちナデ・底部タマリのちナデ
17	2住灰土	〃	〃	22.9	—	—	26	口縁はんの形	—	—	明茶碗	内・外縁ナデ・口縁部ヨコナデ
18	2 住	住	〃	—	6.3	—	131	—	1/2	—	—	内・外縁ナデ
19	2住カツギ	〃	〃	15.7	7.2	22	—	活	变	—	—	内面ナデ・外縁カツギリのちナデ
20	〃	〃	〃	18.4	—	—	858	光	—	—	—	内・外縁タマリのちナデ・底部ヘタケヅリ
21	2 住	住	〃	—	6.5	—	148	—	活	—	—	内・外縁ナデ
22	P ₄	〃	圆	12.9	—	—	6	1/2	—	明茶碗	黑(内底)	内・外縁ヘリカギリ・口縁部ヨコナデ
23	突出面	〃	环	16.2	—	—	7	1/2	—	—	—	内面ヘリカギリ・口縁部ヨコナデ
24	土 壤 11	骨 碗	碗	10.8	—	—	16	1/2	—	轉底	轉底	内外面ヨコナデ・外縁ヘリカギリ
25	突出面	須磨物	环	—	3.2	—	23	—	23	—	—	底部須磨灰
26	2 住	碗	文	—	10.9	—	35	皿	—	—	—	内面ヨコカギリナデ・外縁リリ開文



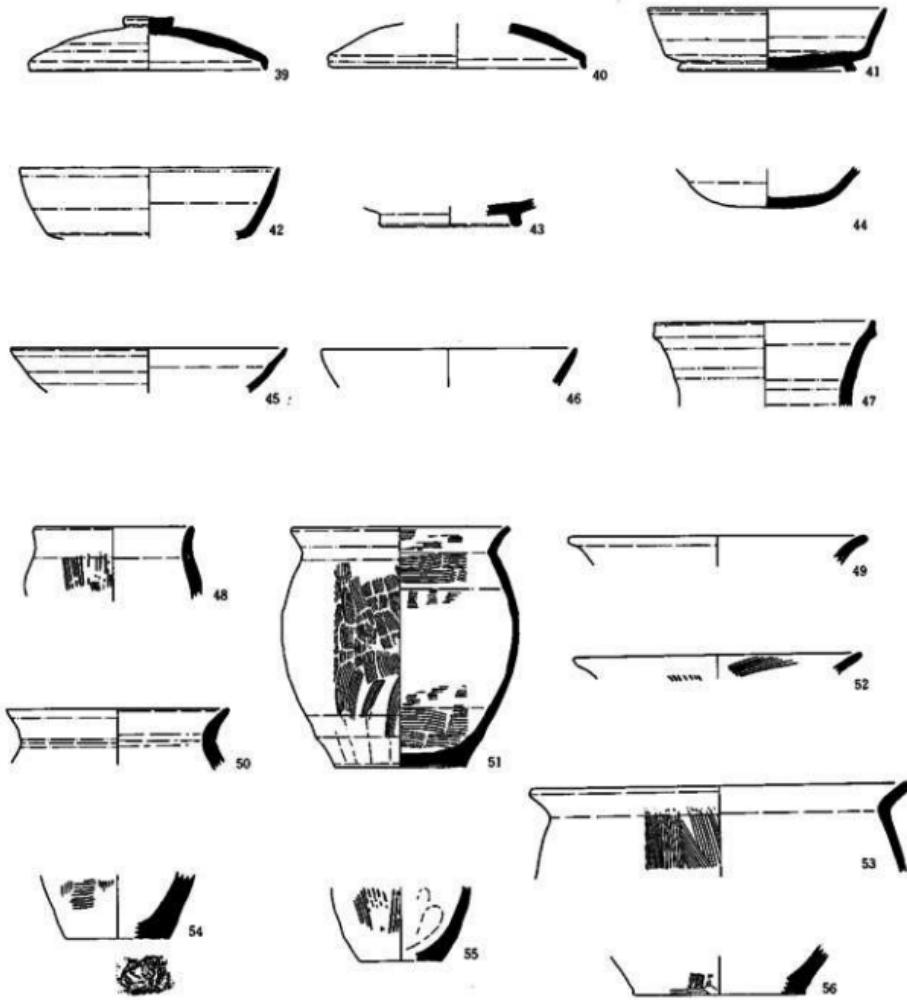
第18図 出土土器実測図(1)



第19図 出土土器実測図(2)

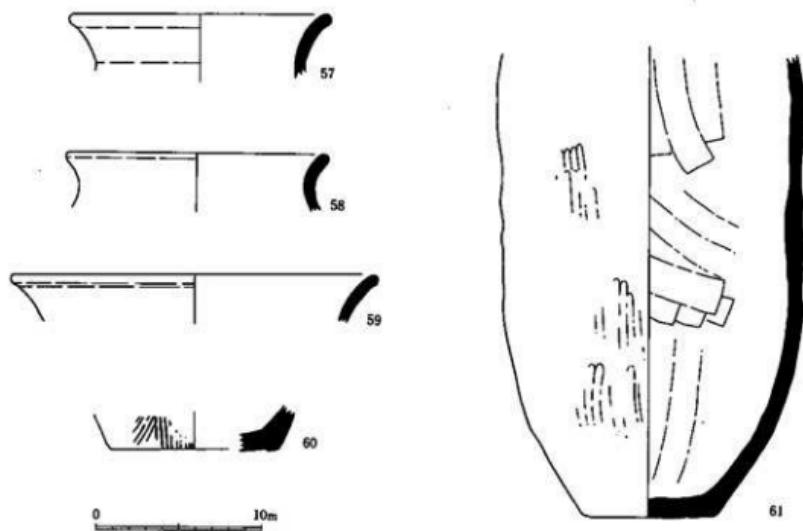


第20図 出土土器 (59年度)



0 10cm

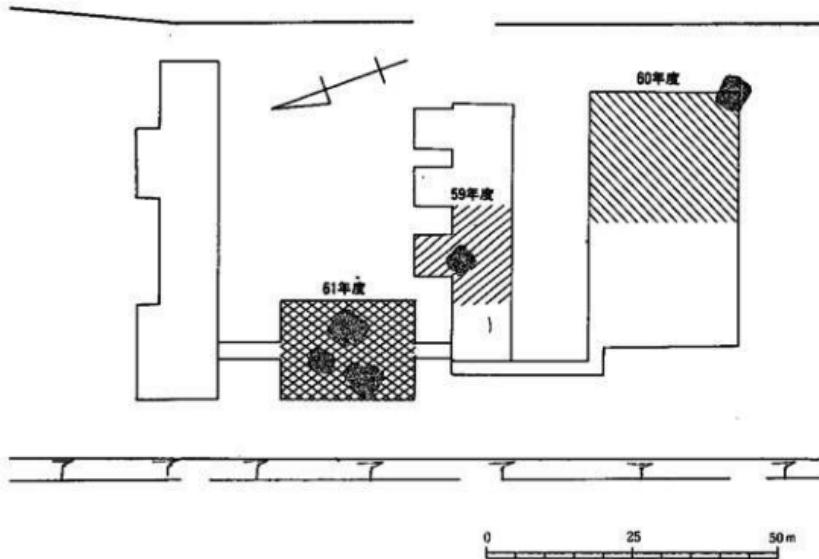
第21図 出土土器（60年度・1）



第22図 出土土器（60年度・2）

第4章 調査のまとめ

下原遺跡は信濃國府推定地の一つ、惣社地区に隣接する里山辺地区に所在する。今回の調査は山辺中学校改築に伴う調査で過去2回行われている。信濃國府跡確認調査の一環として実施されたものである。本年度は校舎改築工事の最終回であるため、信濃國府跡確認調査から離れて別途に調査を実施したものである。過去の調査について概要を記すと1回目の調査は59年に教室棟建設に伴い立合調査したところ、土師器等遺物が出土したので発掘調査したものである。遺構は古墳時代末の竪穴住居址1軒の存在を確認した。搅乱が激しく全容は不明であるが規模は3.6×3.5mを推定する。覆土中及び床面に礫が多く入っており、壁際に焼土や炭化物は確認されたが、カマドは不明である。不明部分が多い割に遺物の出土量は多く、ほぼ完形のものが10点前後出土した。土師器壺、甕、高杯等である。2回目の調査は60年に教室棟及び体育館建設に伴い実施された。調査位置は1回目の南側及び北側の2ヶ所である。北側は搅乱部分と旧耕作土下は黄褐色土の砂礫層で遺構と遺物の確認はできなかった。南側には2ヶ所に土器片の出土があり、内1ヶ所で住居址の一部をとらえる



ことができた。旧校舎建設時の搅乱により全容は不明である。他の1ヶ所は住居址としてとらえられなかったが遺物は土師器甕、壺、小形甕、須恵器壺、壺蓋等がある。以上概要であるが、今年度の調査も含めて7世紀代の住居址が7軒確認され、これらに伴う遺物が多数出土した。この時期の住居址は59年度の南糞遺跡、60年度の南糞遺跡の調査で1、2軒確認されたのみで松本市での調査例はない。最近の当市での発掘調査は中央道長野線建設に伴う、関連事業での調査が大半で地域は河西部の水田地帯が多い。遺跡は奈良時代、平安時代から中世までのものが多く、8世紀以降の大集落址が次々と発見された。里山辺地区を含む東山部では調査の機会が少なく、既出遺物によって推定してきた。特に本郷地区南側から中山地区にかけては、多くの古墳が分布している。しかしこれらの古墳をさえた集落址についてはまだその実体が不明である。今後東山部へは場整備等の開発がかかり調査件数も増加すれば徐々に明らかとなるであろう。この意味で7世紀代の住居址及び遺物を出土した本遺跡の意義は大きいといわなければならない。当遺跡周辺は薄川が形成した扇状地上にあたり、当市でも古くから開けた地域であり、信濃国府推定地が4学説あるうち、3つまでがこの地域にあることでも知れる。

三回にわたる調査結果によって、本遺跡が古墳時代末期の大集落の可能性もあり、それが山辺谷の古墳群や国府を受け入れる程協力な経済基盤の下地をなしていたとも考えられる。

終りにあたり、三年次にわたって発掘調査にご協力ご理解を示して頂いた山辺中学校はじめ、関係機関、山辺公民館、山辺歴史研究会等、地元の方々に力をいただいた。記して謝意を表する。

松本市埋橋遺跡

例　　言

1. 本書は昭和61年6月23日より7月3日にかけて行なわれた松本市埋橋遺跡の緊急発掘に関する報告書である。
2. 本調査は松本市立源池小学校校舎改築に伴なうもので、松本市教育委員会が行なったものである。
3. 本書の編集は事務局が行なった。執筆は、第2章第2節太田守夫、第4章神沢昌二郎、他の項目は木下守が行なった。
4. 本書作成に関し次の者の協力を得た。
石合英子、乾靖子、丸山恵子、塙原久和
5. 出土遺物及び造構測量図類は松本市立考古博物館が保管している。

目 次	挿 図 目 次
第1章 調査経過	
第1節 事業経緯.....43	第1図 調査地の位置.....46
第2節 調査体制.....43	第2図 周辺遺跡.....49
第3節 作業日誌.....44	第3図 遺構配置図
第2章 遺跡の環境	50
第1節 調査地の位置.....45	第4図 畦状遺構、畝状遺構1・2
第2節 地形と地質	52
1 遺跡の地形.....45	
2 遺跡の立地と堆積層.....47	
第3節 周辺遺跡.....47	
第3章 調査結果	
第1節 調査の概要.....51	
第2節 遺構と遺物.....53	
第4章 調査のまとめ.....54	

第1章 調査経過

第1節 事業経緯

本調査は源池小学校改築にかかるもので、担当課より改築計画が示され、そこが遺跡にかかることが判明したので、事前に発掘調査を行うこととし、予算に計上したもので、教育委員会が調査を行うこととした。

調査に先立って遺跡の範囲を確認するため試掘調査を行い、須恵器片を検出したので、校地の北東部分を中心に調査することとしたものである。

第2節 調査体制

調査団長 中島俊彦（松本市教育委員会教育長）

調査担当者 神沢昌二郎（松本市立考古博物館長）

現場担当者 高桑俊雄（社会教育課）

木下守（社会教育課）

調査員 太田守夫（地質）

竹原学

協力者 青木雅志 石松清美 金子富人 塩原久和 丸山恵子

味木祐美 伊丹早苗 川上靖枝 須沢建 丸山誠

有賀邦雄 那垣博子 神戸巖 濑川長広 村山正人

青柳洋子 大出六郎 小松豊子 土肥泰子 宮沢重成

五十嵐周子 奥原富藏 佐々木謙司 原善一 横山倍七

石合英子 開鳴八重子 佐野貞男 丸山愛徳 鶴三智恵

事務局 浜憲幸（社会教育課長）

岩渕世紀（文化係長）

熊谷康治（主事）

直井雅尚（主事）

高桑俊雄（嘱託）

第3節 作業日誌

昭和61年6月23日 月 曇時々雨 丘前建設課と具体的な協議。東地区南側より重機にて表土剥ぎ開始。以下6月28日まで重機継続。土は旧便所位置に盛る事とする。擾乱部分は、約1~1.5m程ある。埋文センター小口氏見学。市教委：高桑、木下（以下市教委は同様）

6月24日 火 曇時々雨 作業の為の下準備。作業員：神戸巖他6名 調査員：竹原学

6月25日 水 曇後雨 本日より検出作業開始。雨の為作業は3時で中止。テントを設営する。作業員：神戸他8名 調査員：竹原

6月26日 木 曇 東地区南検出作業続行。南端の畦状遺構の掘り下げ開始。作業員：神戸他15名 調査員：竹原

6月27日 金 晴 畦状遺構掘り上げ。西地区検出作業。南東部に巾20cm 長さ4m程の数条の細い溝検出。掘り上げるが遺物はなかった。（畝状遺構1とする。） 作業員：神戸他22名 調査員：竹原

6月28日 土 晴 西地区作業継続。重機の作業終了。作業員：佐々木謙司他1名

6月30日 月 雨 雨の為作業中止

7月1日 火 曇 西地区西端検出作業。南西に畝状遺構2を検出し掘り上げる。源池小学校起工式。校長より児童への説明を求められる。作業員：佐々木他13名 調査員：太田守夫

7月2日 水 曇一時雨 平面図（畦状遺構・畝状遺構1、2・全体図東半部）終了 作業員：鷺三智恵他2名

7月3日 木 曇 平面図（全体図西半部）終了。全国のレベルおとし終了。児童への説明会を2回行なう。調査終了の旨学校へ連絡。テントを片付け器材撤出。本日にて作業終了。作業員：鷺他1名

7月4日以降 報告書作成に向けて整理作業を順次行なっている。



東地区南部検出作業風景



西地区西部検出作業風景

第2章 遺跡の環境

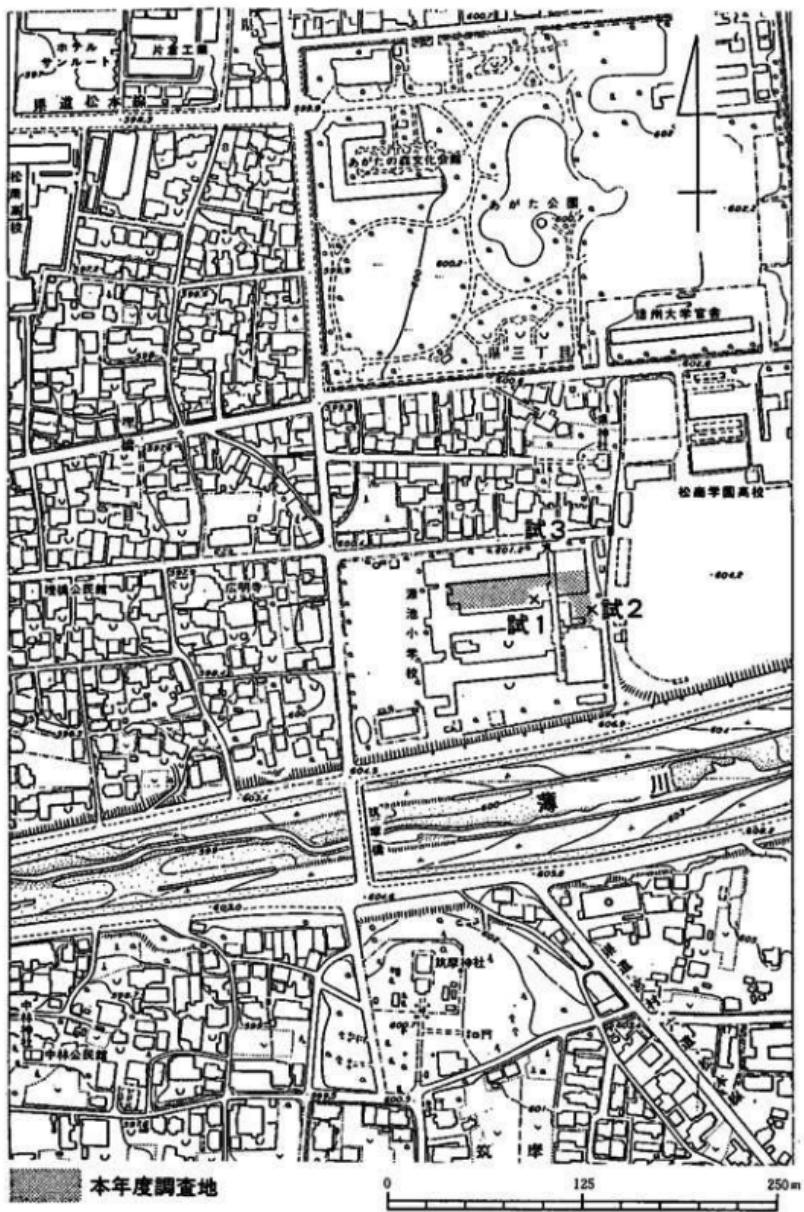
第1節 調査地の位置

本調査地は松本市街地の東端で、南を西流する薄川と、北に南流する女鳥羽川とが形成する複合扇状地の扇端部に位置する。標高約600mで西へ僅かに傾斜する平地である。南へ約150mで薄川、更に50m程行くと旧国宝（現重要文化財）の本殿を構える筑摩八幡宮がある。昭和12年の解体修理の際、社殿下2m余の位置に旧礎石が在ったことから、薄川の氾濫によりこの地が土砂をかぶっても同じ場所に再建されている事がわかる。薄川の左岸には林、神田、筑摩、三才に弥生から平安時代にかけての遺跡があるが、薄川の氾濫を考えると必ずしも居住地に適した土地とは言い難い。東は山辺谷から薄川の扇状地へと開けるが、その扇央部には薄の宮神社がある。この神社は『日本三代実録』に昇叙の記録がみえる古社で、起源は薄川の水靈を祭ったものと考えられている。周りは縄文中期の遺跡に囲まれておらず古くから集落が営まれていたことがわかる。北は350m程の地点にあがたの森文化会館があり、更に500m程の清水橋付近では女鳥羽川が西へと流れを変える。西は1600m程で松本駅、更に300m程で薄川が田川に合流する。北流する田川は女鳥羽川に合流し奈良井川へ流れ込んでいる。本調査地は第1図で見る様に東側は3m程の段を成し松商学園グラウンドと接しており、本調査地とともに遺物出土の報告がある。今回の調査に先立ち3ヶ所で試掘を行ない須恵器片1点を得ている。このときも薄川の氾濫を思わせる砂礫層が各所で何層にも重なりあっていいる様子が観察された。

第2節 地形と地質

1. 遺跡の地形

本調査地から薄川までの至近距離は南へ125m、天井川となっている現河床の左岸の護岸堤防の下に当り、最も新しい氾濫原にあるといえる。標高600m、平均傾斜 1% で現河床より急である。また隣地の松商学園とともに校地として整地がなされているため、その感じをもたないが、松商学園と源池小学校の校地の落差は3mを越えている。地下水位は松商学園で（一）10m、源池小学校の敷地に及んでいるものと思われる。ただ、西方100m以内に湧水となる埋橋一体が広がるので、扇状地末端の極めて近くに当ると思われる。このことは遺跡付近の堆積にも関係をもつことであり、扇状地末端を氾濫堆積が広く覆っている可能性がでてくる。



第1図 調査地の位置

2. 遺跡の立地と堆積層

発掘地でまず驚いたのは、ぼう大な礫の量である。主として大礫で新鮮な河床礫や氾濫礫である。校舎の周辺を掘ると同様な状況が幾度か見られたという。これは前述のように、次第に天井川となってきた河床から、氾濫（河床になったことも考えられる）によることは事実である。表土は整地による埋立・盛土で、その下層の砂礫1~1.5mから自然堆積とみられ、この砂礫が連続して3mを越えるところもあれば、砂質土に変わることもある。また砂質土にも厚薄の変化が著しく、礫層があらわれたり、砂質土と礫層が互層するなど堆積の変化も激しい。一般にこれらの堆積の方向は東西で、松商学園の校地を越えた400m先の薄川の現河床につながる。氾濫原の堆積の様相をよくあらわしていて、礫層と砂質土層が同時異相のものか、あるいは時間差があるものか、現況では判断が難しい。

縄文・弥生・土師・須恵・中世等の土器片の出土や、畦状遺構、畝状遺構などが発見されているが地層に時間差を観察することが難しい。多少の無理をして考察すると、校舎北裏の砂質土の堆積の順序は、西側の砂質土の堆積、中央の砂質土の堆積、中央の砂質土の浸食、礫層の堆積（最も新しい氾濫）の順と考えられる。また埋蔵面の標高を595m、源池小学校の標高を600mとすると、その差5mが畠状地末端への堆積となる。現地で5mまで掘下げると、末端があらわれることになり、遺構遺物の発見が予想される。そうなると出土した土器片、遺構状のものをどう位置づけるか問題となる。実際に林集落の薄川沿いで2mを越える下層から遺構を発見している。

堆積した礫の種類は安山岩・ひん岩・緑色火山岩・砂岩（小片）で下原遺跡と比べると極めて新鮮である。

第3節 周辺遺跡

本遺跡は前述のとおり薄川と女鳥羽川とが形成する複合扇状地の扇端に位置する。この薄川の上流沿いの山地地形を成す山辺谷は最も高い所では1300~1400mの三城から大和合一帯で、縄文早期末から中期にかけての土器片および石鉋・打石斧・黒曜石片が発見されている。やや下って扇央地域にかけては縄文中期から後期にかけての土器片の他石皿・打石斧・石鉋などが発見されている。

中流域の両岸が開けた左岸地域には縄文中期初頭の薄町遺跡、縄文中期から弥生中期にかけての針塚遺跡がある。この遺跡では松本市でも注目に値する条痕文を施した遠賀川式系の土器が発見されている。また山辺中学校周辺の下原遺跡では古墳時代後期の住居址を確認している。周辺には河原石を用いた積石塚古墳群がある。そのうち古宮古墳よりは直刀3点、簪3点が発見されている。また里山辺藤井から本郷へかけての山麓にも古墳が点在し、大正年間に発掘された小丸山古墳からは金環・銀環をはじめ多くの遺物が検出されている。

一方右岸地域では第1節でふれた様に、筑摩、富士電機遺跡より百瀬式から箱清水にわたる弥生

中～後期の遺物が発見されている。やや上流域の林・南小松部落では林御符古墳より直刀2点、剣2点が、南小松巾上古墳より直刀・轡・管玉等が発見されている。これらの古墳は前述の筑摩、富士電機等の遺跡を背景に築造されたものであろう。やや南方に目をやると開成中学校付近に棺護山古墳群があり、その内中山36号墳は上方作意銘三角縁獸帶鏡等が、棺護山2号墳からは放射線状に置かれた直刀5本と剣および、鐵鎌、有孔砥石が発見されている。さらに南には中山古墳群が続いている。

北に目を転ずると女鳥羽川沿いの桜橋付近に繩文後～晩期の女鳥羽川遺跡があり、河床より加曾利B式など後期の土器片の他、打石斧・磨石斧・石錐などの石器、土偶、シカ・イノシシなどの動物遺体、モモ・クリなどの植物遺体などが出土している。他に古墳～平安時代の高坏・木器などの出土がある。四谷では加曾利E式系の完形土器が出土している。

本遺跡の近隣では北に弥生中期から平安時代にわたるあがたの森、松本県ヶ丘高校遺跡がある。ともに土師器をはじめとし須恵器・灰釉陶器・布目瓦などの遺物を出土している。東に隣接する松商学園遺跡では直刀と瑞花双鳥八棱鏡（半欠）・灰釉陶器・綠釉陶器が出土している。また本遺跡では土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器の出土が報告されている。

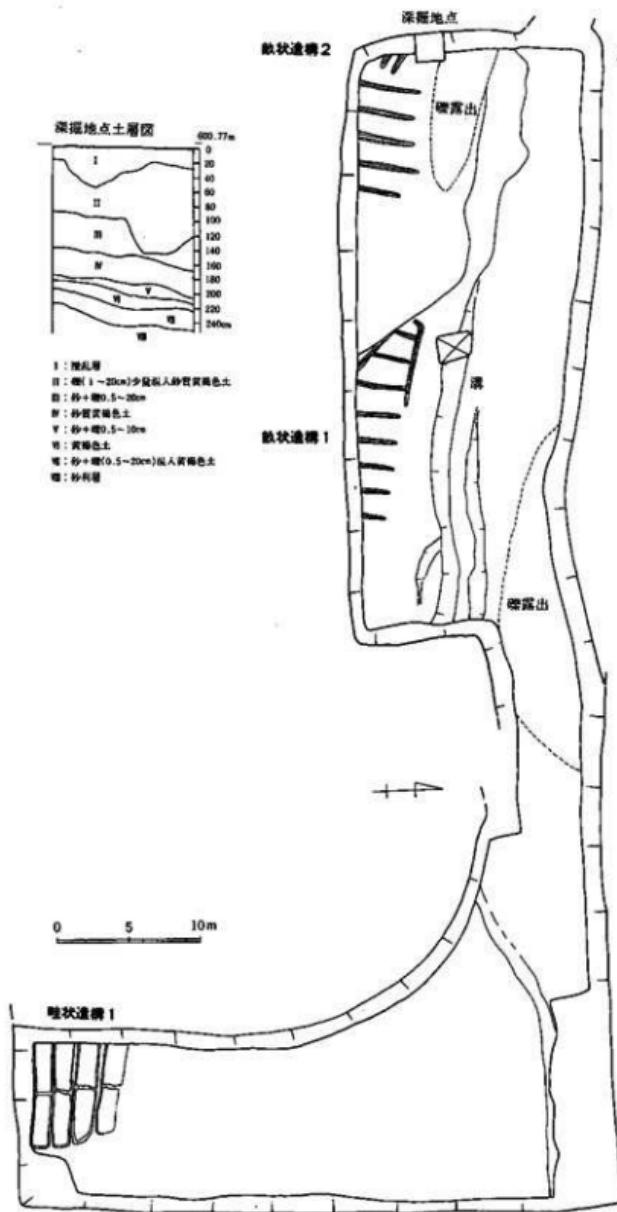
〔参考文献〕

- 長野県史刊行会『長野県史 考古資料編 全一巻（一）遺跡地名表』1981
『筑摩郡・松本市・塩尻市』第二卷 歴史上、1973
松本市教育委員会『長野県立松本工業高等学校遺跡緊急発掘調査報告書』1979・1980
松本市教育委員会『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』1972
松本市教育委員会『長野県松本市あがた遺跡発掘調査報告書』1961



1 寺 所	10 薄 町	19 惣社北	28 御神符古墳	37 中山古墳群
2 西 桐	11 山 田	20 宮 北	29 松本工業高校	38 堆 田
3 堂 村	12 薄田堀ノ内	21 山田入古墳	30 富士電機	39 横 田
4 橋 倉	13 鬼川寺	22 小丸山古墳	31 神 田	40 女鳥羽川
5 わび沢	14 針 塚	23 藤井古墳	32 三 才	41 松本城
6 大 嵐崎	15 荒 町	24 御母家古墳	33 筑 廉	42 四ツ谷
7 林山こし	16 穂石塚古墳群	25 巾 上	34 弘法山古墳	43 県 町
8 緑 田	17 新 井	26 巾上古墳	35 榎原山古墳群	44 松商学園
9 上金井	18 下 原	27 御神符	36 弥生古墳群	45 本道跡

第2図 周辺遺跡



第3図 造構配置図

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

今回の実質調査面積は1246m²である。調査した場所は1箇所であるが、中央部のくびれで便宜上東西2地区に分けた。検出面は礫あるいは礫混入層であり、東地区南端部および西地区的南端部に一部土質部があり畦状遺構1基、畝状遺構2基を検出した。

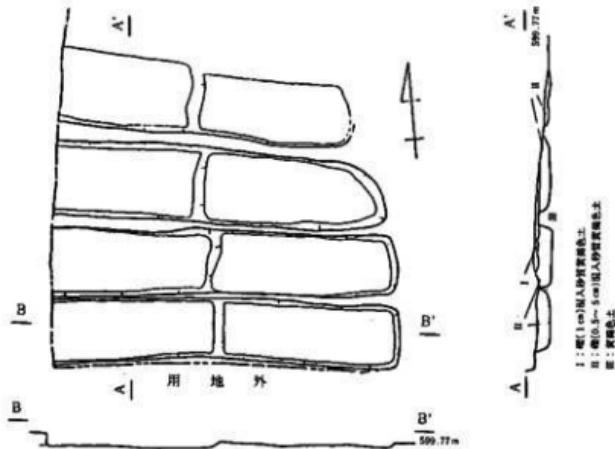
西地区西際に土層観察用の深掘り地点を設けた。その土層を見ると全体に南から北へかなり急な傾斜がみられる。第I層は校舎を建てる際に入れられた土である。第II層は小礫混入の砂質土で、第III層の砂礫層と共に薄川の氾濫を思わせる。第IV層は比較的安定していたと思われる砂質土層で畝状遺構はこの面に検出された。第V層は砂礫層でありやはり氾濫時に形成されたものであろう。第VI層は一番安定している黄褐色土層で畦状遺構を検出した。VII層は大礫混入層、さらにVIII層は砂利層でこれも薄川の影響であろう。以上の様に安定した生活面が存在する可能性が見られるのは、地表より1.5m程のIV層と、同じく2m程のVI層の2つの層だけである。

検出した面について見ると、西地区西際中央部及び北際東寄りからくびれた部分にかけて、土質を含まないきれいな礫層がみられる。畝状遺構Iの北側には溝と思われるものがあった。西側は不明瞭となり東は発掘区域外に延び、東地区では延長と思われる小礫が東西にみられた。流れの方向ははっきりしない。西地区中央部には80×90cmの範囲に校舎を建てた際の擾乱がみられる。遺構検出地は礫混入層で、西地区はほぼ全域がV層、礫部を挟み東地区はVII層にあたると思われる。

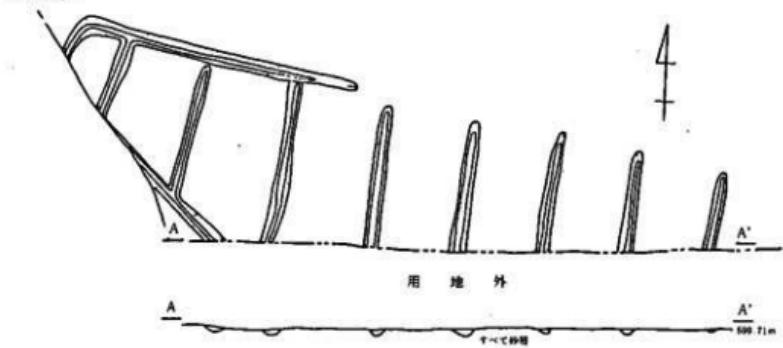
さて今回の発掘に先立ち図1に示した3地点において試掘を行なった。第1地点では校地造成時に入れたと思われる礫混入黄褐色砂質土があり上部は薄く腐蝕土に覆われている。続いて下へ礫混入砂層、礫混入茶褐色砂質土、礫混入砂層で3層共東から西にかなり傾斜している。その下は黄褐色土層で40cm前後の厚さがある。この下では上層をベースに砂礫の流入が見られた。第2地点は花壇であったため耕土として入れた黒褐色土が上面にあった。地表より50cmの地点から下は礫および砂利層で東から西へごく緩やかな傾斜を示している。第1地点の黄褐色土層に対応する比較的安定した土層は観察されなかったが、他は第1地点に準ずる。第3地点は校舎際で全体的に東から西への傾斜がみられ層序は第1地点に準ずる。また安定層は第1地点よりやや黒く発色しておりこの層より須恵器片を1片得ているが割れ口が磨滅しており流入遺物と思われる。

以上時代を決定する様な遺構・遺物は皆無であり、薄川の氾濫が数次にわたり近年まで至っていたことがうかがわえたにすぎない。

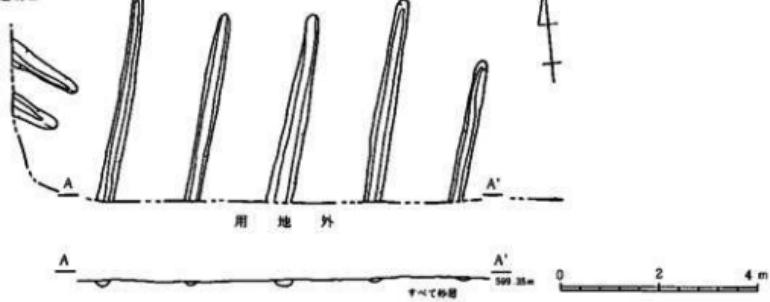
咗状造構



歛状造構 1



歛状造構 2



第4図 咗状造構、歛状造構 1・2

第2節 遺構と遺物

今回検出した遺構は東地区南隅に畦状遺構、西地区南際に東から畝状遺構1・2がある。

畦状遺構の西側部分は校舎建築時の搅乱、南側は調査区域外となるため全容を確認することはできなかった。確認した範囲は南北約7.1m東西約6.5mの46m²余で、東から西へ緩やかな傾斜を示す。東西方向に畦で区切られた4列の区画があり、各区画の幅は1.2~1.5mで東端部より3.2~3.6m付近で段差をもつ。北側の区画ほど西方向へずれ、段差も同程度のずれを示す。底部はほぼ平坦で堅く、畦上から底面までの深さは最大35cmを測る。畦部は黄褐色土（VI層か）で覆土は混疊砂層（V層か）である。段差をもつ部分は傾斜方向に直交しており、V層を薄川の氾濫によるものとすれば畦部が流され段差はその痕跡をとどめたものであろう。さらに段差部分に南北方向の畦を想定するとこれらは水田区画の可能性を考えることができる。類例は茅野市御社宮司遺跡に求めることができます。この場所は上川が東から西（諏訪湖）へ向って流れ、その右岸にあり本調査地とよく似た状況にありその中では中世以後の水田である可能性を指摘している。

畝状遺構1は西地区南際中央に、畝状遺構2はその西3.3mの地点にある。南および西側は調査区域外へ延び全体を検出することはできなかった。畝状遺構は地表下1m程で、東西約13.2m、南北6mの50m²ではほぼ平坦面上に検出した。幅30cm前後の溝状のものが南北に8本走り、西側にそれを囲むように鉤状に回っている。それぞれの間隔は鉤状のものを除き60cm程である。覆土は砂で基盤土は砂質黄褐色土（IV層）である。西側40~60cmの段差をなし下面は混疊層となるが、遺構西端部分が流失していることからかつては僅かに西まで延びていたのであろう。

畝状遺構2はこの西側下段の地表下1.5m程の平坦な面で検出された。基盤土、覆土は畝状遺構1と同様で南北に走る5本の溝状のものも方向が一致する。西側にはほぼ東西に走る溝状のものが2本調査区域外へと延びている。西際深掘地点および調査区側西の土層観察より原地形はほぼ東から西に傾斜しているのがわかり、そのため段を設け耕作地としたものであろうか。畝状遺構1の北は溝が走り、同2の北は疊部で耕作地は存在しなかったものと考える。

遺物は全て検出面からのもので、磨滅の著しい繩文土器片、平安時代末あるいは中世初頭にまで降るかとも思われる台付の灰釉焼片の他、貢入のある染め付の茶碗片、鉄釉小鉢片といった江戸時代末に属するものもあるが、全てが磨滅を受けており流入遺物と考える。また重機による削平時に天目茶碗の底部を得ているが、これとても流入遺物である。

【参考文献】

長野県教育委員会「長野市中央道埋蔵文化財発掘調査報告書—茅野市その5—」昭和52・53年度

第4章 調査のまとめ

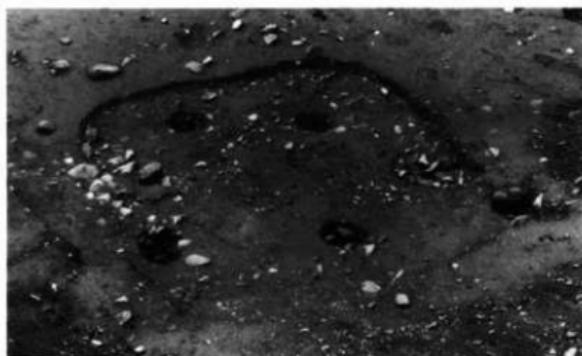
埋橋遺跡は古くは『松本市史』(昭和8年刊)や『信濃考古総覧』(昭和31年刊)などに土器を出しているところとして記載のある遺跡で、その範囲はかなり広範囲にわたっており、平安時代の瓶の出土が知られている。

今回発掘調査を行った埋橋遺跡は源池小学校の敷地内であり、薄川右岸の土手に接した位置にあって、松商学園校庭の直ぐ西にある。松商学園では校庭造成時かその頃に藤原時代の鏡が出土しており、また北側のあがたの森からは弥生時代や平安時代の住居址が検出されている。その点本遺跡も遺構存在の期待を持たせたが、結果は先述のとおり残念ながら的確な遺構の検出にはいたらなかった。

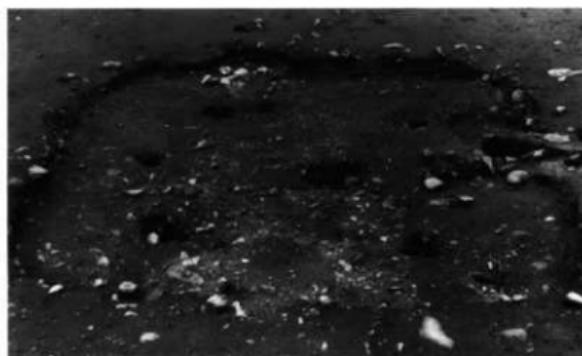
遺物は極僅少で、殆どが摩耗して小さく、時期決定が困難であり、礫層や砂礫層の多いことは位置的に当然のことながら河川の数次にわたる氾濫を物語っており、その氾濫の時期も決定出来ない状態である。河川の堆積については本遺跡の対岸にあたる筑摩神社の本殿を昭和12年に改築した際の所見では、柱の礫石が6尺も砂礫に埋もれていたということであり、また、あがた遺跡を調査した際も、かなり土層が混乱しており、砂礫や礫の層が入り組んでいた。今回試掘調査で検出した須恵器の破片は、明らかに河川の押し流しにより運ばれたもので、周辺に遺跡のあることを窺わせた。遺構については烟の歛状のものが検出された。この周辺は校舎建設以前は桑畠であったと聞いているが、この歛状の遺構が桑畠のものかそれ以前のものかは判断を下せられない。

今回の調査は学校改築に先立ち、文化財保護の立場から発掘調査したものであり、古代人の生活を知る遺構の検出はなかったが、発掘調査の様子を見る機会も少ない児童にとっては、身近な発掘ということで勉強になったのではないかと思われる。

文末になったが今回の発掘調査にあたって源池小学校をはじめ関係の諸氏には多大な御指導御協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。



第1号住居址



第2号住居址



第3号・第4号住居址

图版1



第1号住居址 集石



第2号住居址 集石



図版2

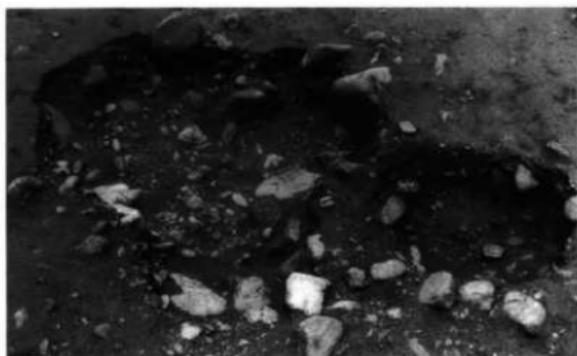
第2号住居址 カマド



カマド内遺物出土状態



建物址



土壤 3·4·5



土壤 8·9



土壤12



土壤13



土壤18·19·20·21
22·25·51

图版4



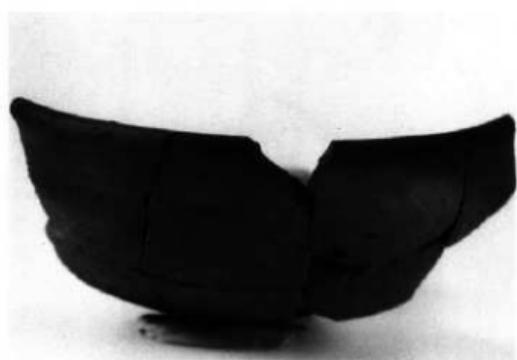
調査地区全体



作業風景



調査参加者



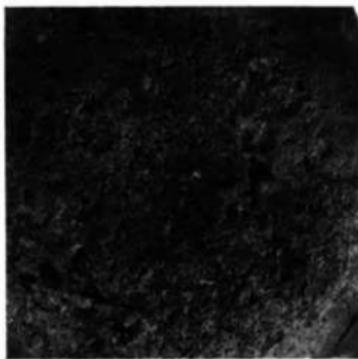
7



2



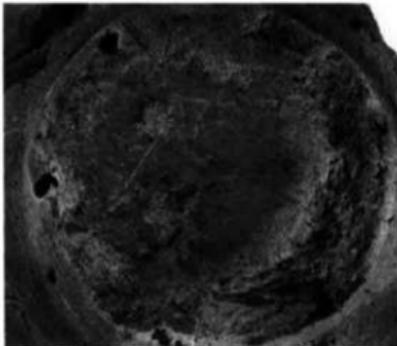
4



4 底部



8



8 底部

图版 6



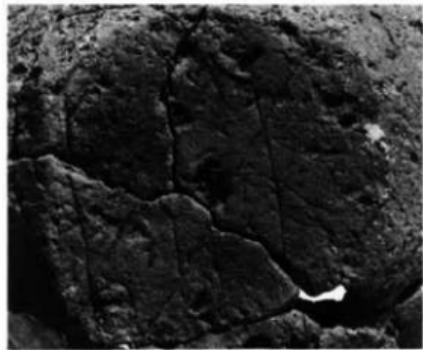
16



19



20

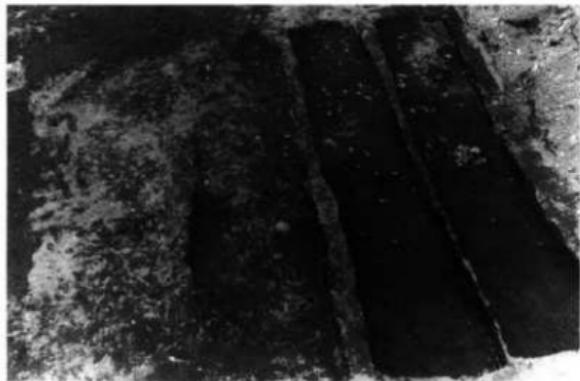


19 底部



10

图版7



蛇状道構



畝状道構 1



畝状道構 2

圖版 8 埋橋遺跡

松本市文化財調査報告No.49・50

松本市下原・埋橋遺跡

昭和62年 3月20日 印刷

昭和62年 3月31日 発行

発 行 松本市教育委員会
印 刷 精美堂印刷株式会社

